

現代中国政治の転換と華国鋒：

『毛沢東選集』第五巻の資料的考察

田 中 仁

| | |
|----------------------------|-----|
| はじめに | 369 |
| I 『毛選』『文稿』『文集』 | 370 |
| II 『毛沢東選集』第五巻の刊行 | 375 |
| III 毛選第五巻所収文献と『文稿』『文集』の関係 | 379 |
| IV 毛選第五巻の資料的考察（その一、人物評価） | 381 |
| V 毛選第五巻の資料的考察（その二、継続革命） | 389 |
| VI 毛選第五巻の資料的考察（その三、農業の協同化） | 393 |
| まとめ | 396 |

はじめに

中華人民共和国政治の二つの転換点として1976年と1978年を掲げることができる。毛沢東は、1976年9月に死去するまで人民共和国の権力構造においてすべての重要事項の決定者であり、彼個人の力ですべての人の政治的運命を決定できた。これに対して1978年12月の「転換」は、毛沢東の「革命」の時代から鄧小平の「改革・開放」の時代への転換と理解されてきた。

毛里和子は毛沢東時代を全体主義体制、鄧小平時代を権威主義体制とし、加藤弘之は中国共産党（以下、中共）十一期三中全会を社会主義から市場経済（資本主義）への転換の開始と位置づける。また人民共和国の政治体制について、三宅康之は、1950年代に構築された党・政・軍三位一体の統治構造が文革後に再建され、1980年代以降、制度化が進行するとする⁽¹⁾。とは言え、十一期三中全会の段階で「改革・開放」という方針が定式化され明示されていたわけではなく⁽²⁾、以後の試行錯誤が必要であった。

2018年12月、習近平は、「改革開放と中国的特色を有する社会主義事業」を中共結党、人民共和國樹立とともに、五四運動以来我が国に発生した歴史的事件であり、近代以来の中華民族の偉大な復興を実現する三大里程標であると述べた。10年前の2008年12月、胡錦濤も、100年来の偉大な革命として、孫文が指導した辛亥革命、中国共産党が指導した新民主主義革命と社会主義革命とともに、「わが党が指導する改革開放という偉大な革命」を掲げていた⁽³⁾。このように現在の中国政治における起点が1978年の「転換」に置かれることから、ともすれば、1970年代全体がまるで転換の下地作りのためだけであったかのようにならされ、歴史のもつ多様性と複雑性がそぎ落とされ、またいくつかの問題については「転換」の叙述のみに専念し、意図的あるいは無意識に「連続」の面が覆い隠されることになった⁽⁴⁾。

この人民共和國期政治の二つの転換点としての1976年と1978年と、毛沢東の「革命」の時代から鄧小平の「改革・開放」の事態への転換としての1978年十一月期三中全会とを媒介する人物として、華国鋒を掲げることができる。華国鋒は、1969年の中共九全大会で中央委員、73年の十全大会で中央政治局委員に昇格、75年の第四期全人代で國務院副総理兼公安部長に就任した。その後、彼は75年4月の天安門事件で党第一副主席・國務院総理、10月の四人組事件で党主席・党軍事委員会主席となり、結果、党・政・軍の権力を一身に担うことになった。これに対して十二全大会（82年9月）における党・政・軍の権力は、胡耀邦総書記、趙紫陽國務院総理、鄧小平軍事委員会主席である。したがって、四人組事件から十二全大会にいたる過程は、華国鋒政権から78年12月の十一月期三中全会の「転換」を経て鄧小平政権に移行したと理解される。

浅野亮は、現代中国政治における華国鋒時代（1976～81年）は毛沢東時代から鄧小平時代へのあまり意味のない過渡期＝間奏曲に過ぎないのかという問題提起を行っている⁽⁵⁾。本稿は、毛沢東没後の政治運営の指針として華国鋒政権が出版した『毛沢東選集』第五卷（毛選第五卷）に関わる資料的考察を行うことによって、単なる過渡期＝間奏曲として回収しえない華国鋒政治の実態への接近を試みる。

I 『毛選』『文稿』『文集』

毛沢東は1943年に党内での領袖としての地位を確立、45年の中共七全大会において「毛沢東思想」を党のすべての活動の指針とする党規約が採択された。毛沢東の著作や選集は根拠地で刊行されていたが、人民共和國成立後、中共黨員と人民が学習すべき教科書として『毛沢東選集』が編纂されることになり、毛沢東自らが主宰し胡喬木・陳伯達・田家英

らからなる出版委員会が組織された。第一巻（1926～37年）が51年10月に、第二巻（37～41年）が52年2月に、第三巻（41～45年）が53年4月に、第四巻（45～49年）が60年10月にそれぞれ刊行された。毛沢東は、読者に内容・叙述の面で完璧なテキストを提供したいと考え、自らの著作にさまざまな改訂を加えた。毛選に収録された文章に、彼自身の同意とリーダーシップのもとで系統的な補充と改訂が施されていたことは、よく知られている⁽⁶⁾。

毛沢東なき後の1977年4月、華国鋒指導部によって毛選第五巻が刊行された。該書は1949～1957年の重要著作70篇を収録、そのうち46篇が初めて公開される文献であった⁽⁷⁾。5月、華国鋒は「プロレタリア階級独裁のもとでの継続革命をあくまでおし進めよう：『毛沢東選集』第五巻を学習して」を出し、毛選第五巻の意義を次のように概括した⁽⁸⁾。

- (1) 偉大な指導者であり教師である毛沢東主席は、わが党、わが軍、わが人民共和国の創始者であり、現代のもっとも偉大なマルクス・レーニン主義者である。毛選第五巻は、中華人民共和国成立後の最初の八年間に、毛主席がわが党を指導して各分野でおしすすめた偉大な勝利の記録であり、その科学的な総括である。
- (2) 毛主席は全党をひきいて、党内に侵入してくるブルジョア思想とたえず闘争し、劉少奇によって代表される、総路線から逸脱した右翼日和見主義を克服した。
- (3) 毛主席は、国際共産主義運動の歴史上はじめて、プロレタリア階級独裁の歴史的運命にかかわるこの重要問題に科学的な回答をあたえ、プロレタリア階級独裁のもとでの継続革命という偉大な理論をうち立てた。毛選第五巻のなかでは、主として1956年から1957年にいたる重要著作のなかで、すでにこの理論がうち出されている。
- (4) 毛主席は、プロレタリア階級独裁のもとでの継続革命の理論によって、わが国の社会主義建設をみちびき、1958年には、大いに意気ごみ、つねに高い目標をめざし、多く、はやく、りっぱに、むだなく社会主義を建設するという総路線をさだめた。選集第5巻の多くの著作には、すでにこの総路線の基本思想が提起されている。
- (5) フルシチョフ・ブレジネフ集団の裏切りによって、ソ連が社会帝国主義に変質し、社会主義陣営がすでに存在しなくなった。現代修正主義者の狂気じみた攻撃の前に、毛主席は断固としてスターリンを守り、マルクス・レーニン主義を守った。
- (6) プロレタリア文化大革命は、総じていえば、プロレタリア階級および広範な革命的大衆と、劉少奇、林彪および王洪文・張春橋・江青・姚文元らの「四人組」に

よって代表される党内走資派との闘争にほかならない。

- (7) 20余年いらいの革命的実践、とくにプロレタリア文化大革命を通じて、プロレタリア階級独裁のもとでの継続革命という毛主席の理論は、わが党を武装させ、広範な大衆を武装させた。

毛選第五巻は華国鋒指導部が掲げる「二つのすべて」(毛沢東が行ったすべての決断を断固堅持し、すべての指示に一貫して従う)をすすめる指針とされたが、真理は実践によってのみ検証されるとする「真理の基準」論争に敗北、改革開放に向けての転換は毛沢東思想の再定義が不可避となった。1981年6月、中共十一期六中全会は「建国以来の若干の歴史問題についての決議」を採択し、以下のように述べた⁽⁹⁾。

- (1) 中国革命の勝利は、マルクス・レーニン主義の指導の下で勝ち取られた。わが党はマルクス・レーニン主義の基本的原理を創造的に運用し、それを中国革命の具体的実践と結びつけて、偉大な毛沢東思想をつくりあげ、中国革命の勝利をかちとる正しい道をさがしあてた (4)。中華人民共和国が生まれて後の中国共産党の歴史は、総じていえば、わが党がマルクス・レーニン主義と毛沢東思想の指導の下に、全国各民族人民を指導して社会主義革命と社会主義建設をすすめ、大きな成果を収めてきた歴史であった (6)。わが党は社会主義事業を指導する面で経験が足りず、党の指導部の情勢分析と国情に対する認識にも主観主義的な片寄りがあったため、「文化大革命」以前には階級闘争の拡大化と経済建設面での焦りと暴走があったが、その後また、「文化大革命」のような全局的な、長期にわたる重大な誤りが発生した (8)。
- (2) 八中全会の路線は正しいものであった。それは、新たな時期における社会主義事業の発展と党の建設のために方向を指し示した(15)。社会主義的改造を基本的に成し遂げてのち、わが党は全国各民族人民を指導して全面的な大規模の社会主義建設にとりかかった。「文化大革命」の前夜にいたる10年間、われわれは重大な挫折もなめたが、やはり非常に大きな成果をおさめた (16)。この10年間のすべての成果は、毛沢東同志をはじめとする党中央の集団指導の下でかちとられたものである。この期間の活動における誤りも、その責任は党中央の集団指導にある。毛沢東同志には主要な責任があるが、誤りのすべての責任を毛沢東同志ひとりにおしつけることはできない (18)。
- (3) 1966年5月から1976年10月にいたる「文化大革命」によって、党と国家と人民は

建国以来最大の挫折と損失をこうむった。この「文化大革命」は毛沢東同志が起こし、指導した。毛沢東同志の起こした「文化大革命」のこれらの左よりの誤った論点は、マルクス・レーニン主義の普遍的原理と中国革命の具体的実践とを結びつける毛沢東思想の軌道から明らかに逸脱したもので、毛沢東思想とは完全区別しなければならない(19)。

- (4)「文化大革命」というこの全局的な、長期にわたる左よりの重大な誤りは、毛沢東同志に主な責任がある。しかし、毛沢東同志の誤りは、究極的には偉大なプロレタリア革命家が犯した誤りであった。かれは晩年、わが国の安全を守ることに依然として鋭い注意を向け、社会帝国主義の圧力をはねかえし、正しい対外政策を実行し、各国人民の正義の闘争を断固支援するとともに、三つの世界の区分についての正しい戦略と、わが国が永遠に覇をととえなないという重要な思想を提起した(22)。
- (5) 1976年10月、江青反革命集団を粉砕した勝利は、危機のなかから党を救い、革命を救い、我が国を新しい歴史的発展の時期へと進ませた。こうして「文化大革命」の誤りの是正を求める党内党外の同志たちの声はますます強くなったが、それは大きな障害につきあたった。当時、党中央の主席であった華国鋒同志が指導思想の面でひきつづき左の誤りを犯したためである(25)。1978年12月に開かれた十一期三中全会は、建国以来のわが党の歴史上、きわめて深い意味をもつ偉大な転換点であった(26)。

こうして「歴史決議」によって、「毛沢東思想」は文化大革命に結実する毛沢東自身の左よりの誤った観点を排除し、かつ「毛沢東同志の科学的著作に集中的に概括される」中共の集団的営為の結晶である、と再定義された。かくして毛選第五巻は1982年4月に販売停止となった⁽¹⁰⁾。9月、華国鋒は中共十二大会で政治局常務委員会を去り、権力中枢から退場した。

1980年代、急激な改革・開放は経済の発展と社会の活性化を招来した。同時にそれは社会の矛盾・ひずみを顕在化もたらし、89年の民主化運動とその挫折に帰結する。また1980年代から90年代初めにかけて、中国は、中ソ関係の修復と東西冷戦崩壊(ヨーロッパ社会主義国の消滅)という国際政治の変容のなかにあった。

1991年、毛選の注釈部分を改訂した第二版(4巻、人民出版社)が刊行された。この後、毛沢東生誕100周年を記念して刊行を始めた『毛沢東文集』(7巻、人民出版社、1993～1997年)は、1921～1976年の文稿を「改訂を行わず、誤字・脱字は注記を付す」かたち

で収録する。また『建国以来毛沢東文稿』（13冊、中共中央文献研究室編、中央文献出版社、1987～1998）は、(1) 手書き文書（文章、指示、講話要綱、コメント、書簡、詩詞、文書への加筆）、(2) 彼自身が認可した講話や談話記録、(3) 彼自身が認可し彼自身の名前で出されたその他の文書を収録する。

中共中央文献研究室が行った毛沢東著作の編纂作業、とりわけ『建国以来毛沢東文稿』と『毛沢東文集』について、中央文献研究室で指導的役割を担った龔育之は次のように述べる。

- (1) 『建国以来毛沢東文稿』は、『選集』などとは編集方針が異なり、正しいあるいは基本的に正しいものを収録するだけではなく、基本的にすべての建国以来の毛沢東の文稿をふくむこととし、正しいものだけではなく、完全に正しいとは言えないあるいは正しくないものも収録することとした。ただ毛沢東の審定を受けていない講話や談話記録は収録していない。こうした編集方針から内部発行とせざるを得ず、公開出版とならなかった⁽¹¹⁾。
- (2) 『毛沢東文集』には多くの講話や談話記録の整理稿を収録しているが、紙幅に限りがあり、とくに正しいあるいは基本的に正しいものを収録するという選稿方針によって、大量の講話や談話記録稿を収録することができなかった。これら未収録の記録稿にも正しい内容が含まれており、あるいは毛沢東の思路を理解するうえで重要なことがらが含まれる。こうした読者の要請に応えるため、『毛沢東年譜⁽¹²⁾』は摘録の方法を用いて文集に収録できなかった多くの講話・談話を公開した⁽¹³⁾。

毛選第五巻が扱う1949～57年について言えば、『文稿』と『文集』は、「歴史決議」によって再定義された「毛沢東思想」に適合するよう毛選第五巻所収文献の改訂が施されて

表1 『毛選』『文稿』『文集』の収録文献数

| | 1949 | 1950 | 1951 | 1952 | 1953 | 1954 | 1955 | 1956 | 1957 | 合計 |
|----|-------|-------|-------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|---------|
| 毛選 | 4 (0) | 6 (1) | 8 (2) | 5 (1) | 13 (5) | 3 (0) | 10 (4) | 7 (0) | 14 (7) | 70 (20) |
| 文稿 | 57 | 466 | 361 | 470 | 183 | 188 | 231 | 325 | 174 | 2455 |
| 文集 | 17 | 34 | 31 | 15 | 17 | 13 | 13 | 27 | 20 | 187 |

上表は、1949年から1957年にいたる各年の『毛沢東選集』第5巻（毛選）と『建国以来毛沢東文稿』（文稿）、『毛沢東文集』（文集）の文献数を整理したものである。また『毛選』における括弧（）の数値は、『文集』に対応する文献が存在しないことを示す。

いるとすることができる。

本稿は、毛選第五卷所収文献70篇のうち46篇が初めて公開される文献であったこと、そして1990年代の『毛沢東文集』において20篇が未収録であることの含意を吟味することによって、毛選第五卷が華国鋒政権と現代中国政治の転換にとってどのような意味をもったのかを考察する。

Ⅱ 『毛沢東選集』 第五卷の刊行

【表2】（後掲）は、毛選第五卷所収の70文献が同書出版以前に公刊されていたかどうかを整理したものである⁽¹⁴⁾。京都大学人文科学研究所『毛沢東著作年表』（上巻・年表篇、1981年）を底本とした。「公刊」欄の○は当該文献が毛選第五卷発行以前に公刊されたことを確認できるもの、×は毛選第五卷で初めて公刊されたことを示す。また▲は『毛沢東思想万歳』など非公認の出版物所収のもの、および語録などのかたちで文献の存在がすでに知られていたものを示す（「備考」欄にそれらの根拠を記した）。○が24、×が30、▲が16となる⁽¹⁵⁾。「要目」欄は、『英文双週刊』（中文稿、第1巻第2期、国際関係研究所、台北、1967年11月）所収の「毛沢東選集第5巻要目」が掲げる文献を示す⁽¹⁶⁾。

公刊ずみの24文献（○）は、『人民日報』のほか、『毛沢東著作選読』（甲種本、乙種本、1964）、『胡風反革命集団に関する資料』（43）、『中国農村における社会主義の高まり』（47）（48）などである。このうち「十大関係について」（51）は『毛沢東思想万歳』などで流布していたが、同文献は1975年7月から本格化する毛選第五卷の編集作業における重要課題と見なされ、毛沢東の審閲を受けた確定版が毛死去後の最初の誕生日（1976年12月26日）に『人民日報』に掲載された。（後述）

紅衛兵による非公認出版物『毛沢東思想万歳』の編集印刷時期と各版本の関係について、京都大学人民科学研究所『毛沢東著作年表』上巻の作成にあたった中村公省は、(1) 甲本が1967年4月、ほぼ同時期に丙本、つづいて1967年前半に乙本の原本、1967年8～9月に『毛主席文選』と推定され、1969年8月に丁本が編集されているが、編集時期の遅い本の編者が既出版の本を参照したという形跡はない；(2) これらの各版本はそれぞれ独自に孤立して出版されたと推定される、と述べる⁽¹⁷⁾。蔣建農ほか『毛沢東著作版本編年紀事』（上下、湖南人民出版社、2003年）の序文において、龔育之が「紅衛兵が印刷した『毛沢東思想万歳』など著作は非合法であるとされ、何度も禁止・破棄が宣告された。とはいえ合法出版物ではないものの現に存在する印刷物であり、広範に流布した⁽¹⁸⁾」としているように、該書ではこれらについての記載を欠いている。

龔育之は、(1) かつて毛沢東の審定をまつ編集済みの『毛沢東選集』第5巻の粗原稿が存在した；(2) しかし毛沢東は、建国以前の著作がすでに実践と時間による検証がなされているのに比して、建国後のものはそうではないとして出版をのぞまなかったと述べる⁽¹⁹⁾。また劉金田らは、(1) 陳伯達（中共中央政治局研究室主任兼マルクス＝レーニン研究院院長）は毛選第五巻の編集に積極的で、自ら主宰して第五巻審査本を作成して中央と毛沢東に送ったが、採択されなかった；(2) 1969年、毛沢東は周恩来と康生に第五巻編集仕事を委託、これを受けて康生は中央党校のスタッフとともに審査本を作成した、毛沢東はこれにも満足しなかった、とする⁽²⁰⁾。こうした経緯から、上述の「毛沢東選集第五巻要目」は、陳伯達による審査本と見なしてよいであろう⁽²¹⁾。

* * *

毛選第五巻の編集作業が具体化するのは1975年7月である。7月5日、國務院弁公室は「毛主席・党中央の批准を受け、國務院は政治研究室を設立する。構成員は胡喬木、吳冷西、胡繩、熊復、于光遠、李鑫、鄧立群同志である」とする通知を出した。これとともに毛沢東の批准により康生・鄧小平・胡喬木による三人小組（『毛沢東選集』工作小組）が成立、これが毛選第五巻の編集工作に責任をもつこと、具体業務は政研室が行うことになった⁽²²⁾。

7月9日、26日、8月8日、21日、9月3日、10日、10月3日、鄧小平と政研室成員による毛選第五巻関連文献の読み合わせが行なわれ、「十大関係について」「梁漱溟の反動思想を批判する」「音楽工作者への談話」「青年団の活動では青年の特質を配慮すべきである」「過渡期における党の総路線」を検討している⁽²³⁾。

1975年12月、「右傾巻き返しに反撃する」運動が全国に拡大し、政研室は活動を停止した。四人組は政研室を重点的打倒対象とし、主たる矛先は胡喬木・鄧力群・于光遠に向けられた⁽²⁴⁾。76年4月の天安門事件を契機に鄧小平解任と華国鋒の党第一副主席・首相就任が決められた。

1976年9月9日、毛沢東が死去した。中共中央は、毛沢東の遺体の保存・毛沢東記念堂建設、および毛選第五巻の出版・『毛沢東全集』の出版準備を決定した。この間の事情として、(1) 四人組拘束という決断が葉劍英と華国鋒・汪東興らにより具体化された、(2) 中央弁公庁副主任・李鑫が主任の汪東興や党第一副主席の華国鋒に具体策を提案した、(3) 10月6日の決起は毛選第五巻刊行を議題とする政治局常務委員会開催を口実とされたことは「よく知られている」。この後、政研室・材料組の李鑫・胡繩・吳冷西・熊復らは毛選第五巻出版に向けて注力した。1977年4月、毛選第五巻出版を受けて毛沢東著作編輯出版委員会弁公室が設立された（主任：汪東興、副主任：李鑫・胡繩・吳冷西・熊復）⁽²⁵⁾。

* * *

龔育之は1975年10月に政研室・材料組に配属されたが、毛沢東の談話記録文書を整理するうえでの原則について、李鑫から次のように伝えられた⁽²⁶⁾。

まず原稿に忠実でなければならない。しかしながら、文章が完全ではないという問題、表現が正確ではないという問題、ロジックが厳密ではないという問題、叙述が重複している問題、さらに事実・歴史・文言について調査を要する問題等々がある。よって細心の注意を払って整理工作を行わねばならない。さらに毛主席のいくつかの観点は後に発展・変化しており、そのいくつかは重大な変化である。これらについては、後の発展した観点にもとづいて以前の文稿にある観点を加工・整理する必要がある。整理ずみの原稿はすべて毛主席がご覧になり、彼の認可を得てはじめて整理作業が完了する。

ここで、毛選第五卷所収文献の性格を検討するうえで特徴的な事例を掲げる。

第一に、鄧小平と胡喬木が主導する国務院政治研究室（政研室）による毛選第五卷の検討作業が「十大関係について」（51）から始められたということである。1975年7月13日、鄧小平は、胡喬木が新たに整理した「十大関係について」を、同著作が大きな指標性と理論的指導性があるので速やかに定稿とし重要文献として公開発表することを検討してほしいというコメントを附して毛沢東に送り、審閲を仰いだ。毛沢東は、すぐにこれに閲覧・同意したが、その後「印刷して政治局同志に閲覧させてもよいが、しばらくの間公開しない。印刷して全党で討論してもよいが報道しない。将来『選集』ができればそこで公開する」と改めた。同文は、毛死去後の最初の誕生日の1976年12月26日、『人民日報』で発表された⁽²⁷⁾。

毛選第五卷の検討作業とともに、国務院政研室は、鄧小平副総理が掲げた全面整頓の三つの綱領文献「総綱を論ず」「工業二十条」「匯報提綱」に参加していた⁽²⁸⁾。1975年11月10日、鄧小平は胡喬木に対して、「三つの指示を綱とするのは正しくない。ただ階級闘争だけが綱であると中央〔毛沢東〕は語った」と述べた。毛沢東の鄧小平批判のポイントはここにある。ここから見て取れるのは、三つの指示を綱とするか階級闘争を綱とするか、「文化大革命」を肯定するか否定するか、1975年の整頓は正しいか間違っているのか、すべてはこの「綱」の支配と決定による⁽²⁹⁾、ということである。

第二に、毛選第五卷ではじめて公開された文献で、かつ『建国以来毛沢東文稿』の注釈で、公開にいたる経緯を解説する以下の二つの事例である。

一つは「事態は変化しつつある」(61、1957年5月15日)で、毛選の文献紹介では「これは、毛沢東同志が書いた文章で、かつて党内の幹部に配布されたことがある」としている。該文は文稿第6冊469～476頁に「根拠《毛沢東選集》第5巻刊印。(有中央档案馆保存的鉛印件)」として収録し、この文献の公表にいたる経緯について、①「本報評論員」による未定稿、内部文献、②「中央政治研究室」と署名、閲覧者を限定し改訂稿を党内に示達、③「毛沢東」の署名とし「新聞記者や党内の信頼できないものには閲覧させない、半年か一年後に状況を見て公開する」、④毛選第五巻ではじめて公表された、と注記する⁽³⁰⁾。該文には次のような文章がある。

- (1) 括弧つきの「共産黨員」、つまり共産黨員の右派—修正主義者がいる。党外の左派、中間派、右派がいる。中間派はおおぜいいて、党外の知識分子全体のほぼ70%を占めるのにたいし、左派はほぼ20%を占め、右派はほぼ1%、3%、5%、さらには10%というように、状況によって異なる。
- (2) 最近、民主政党和大学のなかでは、右派の態度がもっとも断固としており、もっとも常軌を逸している。かれらは、中間派が自分の味方で、共産党についていくはずがないと思いこんでいるが、その実、これはただの夢にすぎない。……党内の右派も党外の右派も、物きわまれば反転す、という弁証法がわかっていない。われわれは、極点に達するまで、なおしばらくかれらをたけり狂わせておく必要がある。かれらが気ちがいじみてくれればくるほど、われわれにとってますます有利である。

もう一つは「1957年の夏季の情勢」(66、1957年7月)で、毛選の文献紹介では「これは、毛沢東同志が1957年7月、青島でひらかれた省・市党委員会書記会議の期間に書いた文章である。この会議で配布され、さらに同年8月、党内の指導的幹部に配布されたとする。該文は文稿第6冊543～553頁に「根拠《毛沢東選集》第5巻刊印(有手稿)」として収録し、注釈において、①「毛沢東はこの文章を何度も改訂した」としてその経過を述べ；②最終的に表紙に「内部文件、注意保存、新聞雑誌に掲載せず、新聞記者には知らせず、党内の信頼できない人物には提供しない。一年ほどまって、中国の新聞雑誌に発表するかどうかを考える」とされたが、結局公表されなかった；③毛選第五巻ではじめて公表された、とする⁽³¹⁾。該文には次のような文章がある。

- (1) わが国の社会主義革命の時期には、反共、反人民、反社会主義のブルジョア右派

と人民との矛盾は敵味方のあいだの矛盾であり、食うか食われるかの和解できない敵対性の矛盾である。労働者階級と共産党に常軌を逸した攻撃をかけているブルジョア右派は、反動派であり、反革命である。そう呼ばずに、右派と呼ぶのは、一つには中間派の獲得を容易にするためであり、二つには右派を分化させて、一部の右派分子が態度を変え、近づいてこられるようにするためである。

- (2) 反革命分子がいれば、かならず肅清する。処刑者の数は少なくしなければならないが、死刑は決して廃止せず、大赦もけっしておこなわない。
- (3) 大字報は、商店の売り場、農村（区、郷）、小学校、軍隊の大隊と中隊以外のところでは、どこに貼ってもよい。わが国の条件のもとでは、これはプロレタリア階級に有利で、ブルジョア階級に不利な闘争形式である。

現代中国政治の転換との関連から言えば、前者の事例（「十大関係について」）は毛選第五卷の継承的側面を、後者の事例（「事態は変化しつつある」「1957年の夏季の情勢」）は断絶的側面を示している。

Ⅲ 毛選第五卷所収文献と『文稿』『文集』の関係

1978年12月、中共十一期三中全会は、76年4月の天安門事件を革命的行動であると認定するとともに、彭徳懐・陶鑄・薄一波・楊尚昆の名誉回復を決定した⁽³²⁾。これを契機として毛沢東著作編輯出版委員会が毛選第六卷と毛沢東全集の具体化に向けて作業を行うことは困難となり、汪東興は弁公室主任の職務を辞し、胡喬木が引きついだ。李琦来が李鑫に代わって常務副主任となった。1980年初め、廖蓋隆と龔育之が弁公室副主任に任命された。5月、同弁公室は中共中央文献研究室に改編、毛沢東以外の指導者をふくむ中共中央文献を包括的に編纂することになった⁽³³⁾。

これ以降、政治・社会環境が政治闘争から経済建設に向けて大きく転換するなかで、文革で批判された人々の名誉回復が進んだ。80年2月の五中全会での劉少奇の名誉回復から81年1月の林彪・四人組裁判を経て、6月、六中全会は「歴史決議」採択による「毛沢東思想」再定義に到達した。『文稿』『文集』は、「毛沢東思想」の再定義をふまえて中央文献研究室を中心に編纂されることになった。

【表3】（後掲）は、毛選第五卷所収文献と『文稿』『文集』の関係を整理したものである。「選集第五卷、説明」欄は、標題に付加された説明文を示す。

「文稿、冊頁」欄の「①4-8」は、「文献01」が文稿第1冊の4-8頁に収録されていること

を示す。すなわち、毛選第五卷所収の70文献のうち、『文稿』に53文献が収録されている。また、イタリックで示した「④330」（文献34）「⑤71-76」（文献41）「⑥592-598」（文献67）は「提綱」（メモ）を、「⑥247」（文献56）は『人民日報』新聞稿をそれぞれ収録している。

「文集、対照」欄は、毛選第五卷と『文集』との所収文献の対照関係を示す。「○」は『文集』に収録されているもの、「▲」は一部を収録するもの、「×」は未収録のものである。毛選第五卷所収の70文献のうち、46文献（「○」）が『文集』に収録され、一部収録（「▲」）が4文献、未収録（「×」）が20文献である。また「+」はテキストを付加しているものである。

「文集、来源」欄は、『文集』所収文献の本文の最後に記された文献の来源である。

ここで『選集』『文稿』『文集』における文献の記載形式に関わる特徴をまとめておく。

毛選第五卷は、①「毛沢東主席」を用いる、②文献の説明は文献の性格を簡潔に概括している、③本文は政治的「経典」として不要な部分を削除している。これに対して、『文稿』は、①レベルの高い内部発行である⁽³⁴⁾、②「毛沢東」を用い、文献の属性（たとえば文献の発出者と受信者）や出所を明示する、③出所に選集第五卷所収テキスト如何を記載する。さらに、『文集』は、①公開発行である、②「毛沢東」を用い、テキストの属性（たとえば文件の発出者と受領者）や出所を明示する、③出所に『選集』第5卷所収テキスト如何の記載はない。

この毛選第五卷と『文稿』『文集』の資料の記載形式の相違は、前者が「中華人民共和国成立後の最初の8年間に毛主席がわが党を指導して各分野でおしすすめた偉大な勝利の記録⁽³⁵⁾」であるのに対して、後者は、「歴史決議」が文化大革命に結実する毛沢東の左よりの誤った観点を排除し、かつ「毛沢東同志の科学的著作に集中的に概括される」中共の集団的営為の結晶であると「毛沢東思想」を再定義したことによる。すなわち毛選第五卷における偉大な政治的経典という位置づけから、毛沢東以外の指導者のさまざまな論述との比較考量を可能にする記載形式への転換が求められたのである。

【表4】は、『毛選』第五卷所収文献の標題に付加された説明文と『文集』所収文献の属性（発出者・受領者の記載）を整理したものである。

表4 『選集』の標題説明と『文集』が記載する文献の属性

| no. | 『選集』の標題説明 | 『文集』が記載する属性（発出者→受領者） |
|-----|--|--|
| 05 | 毛沢東同志が中共中央中南局および華東局、華南分局、西南局、西北局にあてた通達 | 毛沢東→鄧子恢並林彪、饒漱石、葉劍英、鄧小平 |
| 10 | 毛沢東同志が中国人民志願軍にあてた命令の抄録 | 毛沢東→彭、高、賀、鄧、洪、解 ¹ 及中国人民志願軍各級領導同志們 |
| 18 | 毛沢東同志が農業協同化に反対した劉少奇に反駁を加えるために起草した重大な歴史的意義をもつ党内通達 | 中央→各中央局、並転分局、省、市、区党委 |
| 21 | 毛沢東同志が中共中央統戦工作部の起草した文書に書いた意見 | 毛沢東→羅邁 [李維漢] |
| 23 | 毛沢東同志が中共中央と中央軍事委員会のために起草した、中央人民志願軍責任者への指示 | 中央及軍委→彭、鄧、楊、甘 ² 各同志、及志願軍各級領導同志、並告各中央局、分局、各大軍区、軍委各部門及軍事学院各首長 |
| 24 | 毛沢東同志が中共中央のために起草した党内指示 | 中共中央→各中央局、分局並転各省市区党委、地委和县委、並告中央各部門、中央人民政府各党組 |
| 26 | 毛沢東同志が中共中央のために起草した党内指示 | 中共中央→各中央局、分局、並転省市委、地委和县委；中央各部門和中央人民政府各党組 |
| 39 | 毛沢東同志が中共中央政治局の同志およびその他の関係ある同志にあてた書簡 | 毛沢東→各同志 ³ |
| 45 | 毛沢東同志が中共中央のために起草した党内指示 | 中央→上海局、各省市、自治区党委 |

¹ 彭德懐、高崗、賀晋年、鄧華、洪学智、解方（『毛沢東文集』第6巻、101頁）。

² 彭德懐、鄧華、楊得志、甘泗淇（『毛沢東文集』第6巻、246頁）。

³ 「各同志」の内容について、『文集』では以下の「注釈」を付加している。毛沢東のこの書簡の封筒には下記の書き込みがあった。「劉少奇、周恩来、陳雲、朱徳、鄧小平、胡繩、彭真、董老 [董必武]、林老 [林伯渠]、彭德懐、陸定一、胡喬木、陳伯達、郭沫若、沈雁冰、鄧拓、袁水拍、林淡秋、周揚、林楓、凱豊、田家英、林黙涵、張際春、丁玲、馮雪峰、習仲勳、何其芳諸同志閱。退毛沢東」（『毛沢東文集』第6巻、353頁）。

以下、毛選第五巻所収資料を『文集』『文稿』『年譜』などと対照・整理することにより、毛選第五巻の特徴を明らかにする。

IV 毛選第五巻の資料的考察（その一、人物評価）

中央工作会議（1978年11月10日～12月13日）は、中共十一期三中全会に向けて党の工作の中心を社会主義現代化建設に移すために経済問題を中心に議論することになっていた。しかしながら開会直後の東北組での陳雲発言を契機に、議題が歴史問題と党指導部批判に変更され、真理の基準に関する討論から人事問題に及んだ。この過程で華国鋒は議事運営のコントロールを喪失し、結果、党中央の主たる責任者が鄧小平に移行した⁽³⁶⁾。

11月25日、中央工作會議全体會議において、華国鋒は中央政治局を代表して次のように言明した。(1) 天安門事件を完全な革命的大衆運動であり、徹底的な名誉回復が必要である。(2) 実践が示すように、「反右傾翻案風」は誤りである。(3) 「二月逆流」は林彪一味が是非を転倒し意図して陥れたものであり、林彪事件後、毛主席はすでにしかるべく判断を改めた。(4) 薄一波同志らの「六十一人案件」は重大な冤罪であり、中央はその名誉回復を決定する。(5) 彭德懷同志が外国と通じたとする嫌疑に根拠はなく、こうした見方は成り立たない(遺骨を八宝山公墓に安置する)。(6) 陶铸同志がかつて叛徒であったすることは誤りであり、名誉回復すべきである(遺骨を八宝山公墓に安置する)。(7) かつて楊尚昆同志が反党の陰謀を企て外国に通じたとする認定は誤りである(党の組織生活を回復させ工作を分配する)。(8) 康生・謝富治両同志に対する人々の憤りと批判をふまえて、彼らの行為について組織部の審理にゆだねる。(9) 地方の重大事件については、地方の各党委が実情をふまえて処理する⁽³⁷⁾。ここでは、1975～76年の「反右傾翻案風」と天安門事件の再評価に加えて、文化大革命期において、軍長老が林彪・江青らによって批判され(二月逆流、67年2月)、あるいは薄一波が「六十一人案件」(1935年の偽装転向事件)によって失脚させられ、また楊尚昆や彭德懷・陶铸が「通敵行為・叛徒」として断罪・処断さらには非業の死を遂げたことに対する清算が求められた。

1979年10月の建国四十周年を記念する葉劍英の演説は、はじめて党が過ちを認めた。それは、自画自賛の空虚なスローガンに終わりを告げ、国が直面する課題に真正面から取り組むための大きな突破口となった。鄧小平は、歴史評価をすすめるために、旗幟鮮明な改革派の胡耀邦を責任者とし、党の正統性擁護を最優先に考える二人の保守派・胡喬木と鄧力群を世話役とするプロジェクトチームを組織した⁽³⁸⁾。11月、劉少奇案件復査組は「情況報告」を中央に提出、華国鋒・汪東興をふくむ全員が同意した。80年2月、中共五中全会は、(1) 八期十二中全会の決議・関連文献を取り消し劉少奇の名誉を回復する、(2) 劉少奇の冤罪に関連するすべての事案を見直し名誉を回復すると決議した。劉少奇の名誉回復によって、文革中における毛沢東の誤りを明示することが急務となった⁽³⁹⁾。

1980年12月から翌年1月にかけての林彪・四人組裁判において、江青は最大の罪は毛沢東が犯したと述べた。このため中共は、毛の全面否定を回避すると同時に某かの方法で事実と向き合わねばならなかった。歴史決議の起草にあたって、鄧小平は「毛沢東同志の歴史的地位を確立し、毛沢東思想を堅持・発展させること。今日だけではなく将来においても、我々は毛沢東思想の旗を高く掲げる必要がある。最も重要で最も根本的なポイントはここにある」と述べた⁽⁴⁰⁾。

1981年6月、中共十一期六中全会が採択した歴史決議は、鄧が希望したようなバランス

の取れた評価を行なうとともに、毛が誤りを犯した原因を以下のように提示した。彼に対する威望が絶え間なく上昇していった時、彼は傲慢になり彼自身を党の上に置くようになった。また同志たちもしかるべく対処しなかったので集団指導が弱まった。党内民主は制度化されず、規律は権威性を失った。スターリン主義の指導モデルと長期にわたる中国の封建専制制度が大きな影響を与えた、と⁽⁴¹⁾。

人物評価にかかわる選集第五巻の資料的考察として、第一に、唐亮が作成した「現代中国の政治権力闘争年表」⁽⁴²⁾（以下、[年表]）を手掛かりに、選集第五巻所収資料と『文集』等の記載を比較・整理する。

(1) 劉少奇の新民主主義論に対する批判（1950～1954年）

[年表]：①劉少奇は、経済の安定と発展を重視し、さらに工業化の進展を社会主義体制へと移行する前提条件として、新民主主義の経済秩序の確立を主張し、社会主義体制への早期移行に反対した。②毛沢東は、社会主義体制への早期移行を主張して劉少奇の主張を批判した。③高崗と饒漱石は、劉少奇に対する毛沢東の批判を利用して、劉少奇を攻撃した。④毛沢東は、高崗と饒漱石の派閥的行動を分裂、権力の野心と糾弾して劉少奇を支持した。一方、劉少奇は、自らの主張について、1955年の党の全国代表大会で自己批判した。

「総路線から離れた右よりの観点を批判する」(選集28、1953年6月15日)。『毛選』の標題説明において「毛沢東同志は、この講話のなかで、劉少奇らの提起した“新民主主義の社会秩序を確立する”などの右翼日和見主義的観点に対する批判を加えた」と述べる。『文稿』第4冊は「政治局会議における講話提綱(ノート)」を「毛沢東手稿」から収録し、「いくつかの誤った観点の一つとして、“新民主主義的社会秩序の確立”」を掲げる(351頁)。さらに『年譜』では、「毛沢東は講話のなかで、過渡時期の党の総路線について比較的全体的な論述を行った」としてその慷慨を述べる(第2巻、115-117頁)。『文稿』『年譜』とも劉少奇への言及はない。

(2) 薄一波批判（1953年）

[年表]：①薄一波・財政部長が独断で導入した新税制は、毛沢東の激しい批判と地方指導者の反発を招いた。②高崗と饒漱石は、事件を利用して、全国財政会議で薄一波と劉少奇を攻撃した。③薄一波は自己批判して財政部長を解任されたが、高崗・饒漱石事件後に復活した。

「党内のブルジョア思想に反対する」(選集32、1953年8月12日「毛沢東同志が1953年夏

の全国財政・経済会同会議で行った演説)は、薄一波(政務院財政経済委員会副主任・中央人民政府財政部部長)を次のように批判する。

- (1) 財政・経済活動のなかでの誤りに対しては、去年の12月に薄一波同志が「公私の一律平等」の新税制をもちだしてから今回の会議にいたるまで、きびしく批判してきた。この新税制をおし進めていけば、必然的に、マルクス・レーニン主義から遊離し、過渡期における党の総路線から遊離して、資本主義にむかって発展していくであろう。
- (2) ブルジョア階級と合作した時期、つまり第一次国共合作の時期、抗日戦争の時期と現在のこの時期には、いずれもブルジョア思想が党内の一部の人に影響をおよぼし、彼らを動揺させた。薄一波は、このような状況のもとで誤りをおかしたのである。

この文献は『文稿』『文集』ともに未収録である。『年譜』では、毛は「薄一波同志の誤りを批判するなかで、恩来・陳雲同志は自らにも責任があると述べたし、“私にも責任がある。それぞれに各自の帳簿がある”」と述べて自らが犯した6点の誤りを列記する(第2巻、148-149頁)。

「農業の互助・協同化についての二回の談話」(選集36、1953年10月15日、11月)は、『文集』第6巻に収録する(298-307頁)。この二つのテキストにはいくつかの表記上のズレが確認できるが、『文集』所収テキストが、毛選第五巻所収テキストの「総路線の問題は、7月、8月にひらかれた財政・経済会議がなければ、解決されなかった問題である。7月、8月の会議は、おもにこの問題を解決することにあった。薄一波批判は、総路線からはずれたかれの誤りへの批判であった。総路線を一言に概括すれば、国の社会主義的工業化と農業・手工業・資本主義的工商業に対する社会主義改造を逐次実現するというものである。」における下線部分を削除している(304頁)。

(3) 農業合作運動に関する鄧子恢批判(1953～1956年)

[年表]: ①鄧子恢・中央農村工作部長は、農民の意識と幹部の素質を考慮して農業生産の安定的発展を強調するとともに、緩やかな農村合作社化を主張した。これに対して、毛沢東は合作社運動の加速を主張し、数回にわたり鄧と対立した。②1955年、毛沢東は鄧子恢を「右傾」「小脚女人」と批判して譚震林を農村工作担当の中央指導者に任命し、事実上、鄧子恢の権限を制限した。③急速な農村工業化に消極的であった多くの幹部が批判と

処分を受けた。闘争の範囲は広く、マイナスの影響は大きかった。

「農業協同化の問題について」(選集44、1955年7月31日)、『文集』は同文を『人民日報』から収録し、この文献が鄧子恢批判を意図したものであるとしたうえで、十一期三中全会後の名誉回復を次のように記載する⁽⁴³⁾。

これは毛沢東が中共中央の招集する省委・市委・自治区党委書記会議での報告である。この報告で彼は、中共中央農村工作部長・國務院副総理の鄧子恢、ならびに彼が指導する中央農村工作部の農業協同化問題におけるいわゆる右傾の誤りに対して名前を伏せて批判した。中共十一期三中全会以降、1980年12月、国家農業委員会党組による事実関係の調査にもとづく上申書を中共中央に提出した。81年3月、中共中央は、①鄧子恢と彼が主宰した中央農村工作部は党の路線・方針・政策を堅持し、その成績は顕著であった、②彼の農業協同化に対して提出した見解は概ね正しいものであった、③党内の彼と中央農村工作部に対する批判と処理は誤りである、とした。

「農業協同化についての弁論と当面の階級闘争」(選集46、1955年10月11日、中共七期六中全会での結論)には、鄧子恢に関する以下の叙述がある。

- (1) 鄧子恢同志は誤りを犯したが、その性質は右傾の誤りに属する。鄧子恢同志は自己批判を行った。各組の会議で一部の同志はかれの自己批判がまだ不徹底だと言っているが、われわれ政治局の同志、またいく人かの同志たちは意見を交換し、これを基本的によいものだと考えている。いまの時点でかれがこうした認識をもつようになったのは、すでに上出来といえよう。鄧子恢同志は、これまで長期にわたる革命闘争のなかで多くの仕事をやり成果を上げてきた、この点は認めるべきである。
- (2) 以前、鄧子恢同志は商人に依拠する(つまりブルジョア階級に依拠する)とか「四つの自由」とかの綱領的な提起をしたことがあるが、それは誤ったもので、たしかにブルジョア的な綱領、資本主義的な綱領であり、プロレタリア的な綱領ではない。それはブルジョア階級を制限するという七期二中全会の決定に背いている。

この文献は『文稿』『文集』に未収録であるが、『年譜』には上掲の(1)の部分が引かれている⁽⁴⁴⁾。

(4) 李維漢批判 (1962～1965年)

[年表]：①李維漢・中央統戦部長は、1956年以降、民主党派の社会主義政党への改造、数年間の改造工作によるブルジョア階級の消滅を主張していた。②毛沢東は、1962年の八期十全大会で李維漢の主張を「右傾」と批判した。これを受けて中央統戦部は、1962年10月および1964年8月に李維漢の「誤り」を批判した。③1964年12月以降、李維漢は、中央統戦部長・全人代副委員長・全国政治協商会議副主席などの職務を解任された。

「労働者階級とブルジョア階級との矛盾は国内における主要矛盾である」(選集21、1952年6月6日)の標題説明は「これは中共中央統一戦線部が起草した文献に毛沢東同志が加筆した評語である。毛沢東同志は、同部責任者の民族ブルジョア階級を中間階級と見なす誤った観点を批判した」とする。これに対して『文集』所収テキストは手書き原稿から収録する。そこでは、①標題を「現段階の国内の主要矛盾」に改め、「文件を閲読し加筆した。再考されたい」という毛沢東の評語を付した「羅邁同志」宛文書とした。②注釈でこの文件が「中共中央の民主党派工作についての決定(草稿)」であり、羅邁が当時中央統戦部部长であった李維漢であることを注記する。

これら四つの事例は、毛沢東と劉少奇・薄一波・鄧子恢・李維漢との関係について、毛選第五巻では毛沢東による劉少奇らの誤った見解に対する正当な批判という構図が提示されているのに対して、『文稿』『文集』は、両者の関係を指導者間における見解の相違として、換言すれば、双方の見解が歴史決議によって再定義された毛沢東思想(中共の集団的営為の結晶としての毛沢東思想)に含まれるものとして再定置されたことを示している。

人物評価にかかわる選集第五巻の資料的考察として第二に掲げるべき事からは、劉少奇に関わる叙述である。すでに述べたように、選集第五巻が「プロレタリア文化大革命は、総じていえば、プロレタリア階級および広範な革命的大衆と、劉少奇、林彪および王洪文・張春橋・江青・姚文元らの「四人組」によって代表される党内走資派との闘争にほかならない」としていたのに対して、歴史決議が「1966年から1976年にいたる「文化大革命」によって、党と国家と人民は建国以来最大の挫折と損失をこうむった。この「文化大革命」は毛沢東同志が起こし指導した」と規定したことによる。

劉少奇については、毛選第五巻において6つの事例が確認できる(上述の選集28「総路線から離れた右よりの観点を批判する」を含む)。

(1)「徹底した革命派になろう」(選集08、1950年6月23日)。『文稿』第1冊は「『毛沢東選集』第五巻にもとづき組版作成。原載は『人民日報』1950年6月24日」と来源を記す

(418頁)。そして「みなさんは、劉少奇副主席の報告と中国共産党中央の提出した土地改革法案に賛成し」の下線部分に注記し、「この“劉少奇副主席の報告及”の10字は毛選五巻では削除されている」とする(415、418頁)。

(2)「中国共産党中央政治局会議の決議の要点」(選集12、1951年2月18日)。毛選第五巻の注3は、「“重石を取り除く”(搬石頭)というのは、1948年、解放区の土地改革と整党のさいに、劉少奇が提起したものである。広範な農村幹部は農民を押さえつける“重石”であると中傷して、これらの幹部を解任、除名しようとした」とする。これに対して、『文集』第6巻所収テキストの注4では「いわゆる“重石を取り除く”とは、現有の党支部を破棄し、もとの基層幹部を一律に免職とし、ある地域では多くの地主・富農家庭出身の党員の党籍を停止するに及んだ」と解説する(147頁)。

(3)「重大な事業として農業の互助・協同化にとりくもう」(選集18、1951年12月15日)。同文献の表題説明は「これは、毛沢東同志が、農業協同化に反対した劉少奇に反駁を加えるために起草した、重要な歴史的意義を持つ党内通達である」として、①1951年7月に劉少奇が山西省委員会の報告に書いた評語を各地に配布した、②この評語が「毛沢東同志の路線に反対し、これを“誤った、危険な、空想的な農業社会主義思想”だと中傷した」と述べる。これに対して、『文集』では、本文に発出者と受領者を付加するとともに、毛沢東が農業生産互助合作に関する中共中央の決議草案(1951年12月15日)を審閲したときの発言要旨を注記する⁽⁴⁵⁾。ちなみに、この要旨は具体的な方針にかかわるもので、劉少奇への言及はない。

(4)「劉少奇・楊尚昆が規律にそむき、独断で党中央の名義を用いて文書を出したことに對する批判」(選集27、1953年5月19日)。『毛選』の標題説明は「これは、毛沢東同志が劉少奇・楊尚昆に対し、二回にわたっておこなった書面の批判である」とする。これに対して『文稿』第4冊は、標題を「中央の名義で発する文件・電報問題についての書簡とコメント」に改めて毛の手稿から全文を収録し、毛沢東がそのように述べるにいたった経緯を明示する(229-230頁)。そして「本篇は以前、毛選第五巻に節録され、当時の政治的必要をふまえた標題・標題説明が加えられたが、このことは实事求是の科学的態度に違反している。今回本書に収録するにあたって手稿の全文に拠って植字し、歴史的資料の原貌を回復した」と注記する(230頁)。

(5)「紅樓夢研究の問題についての書簡」(選集39、1954年10月16日)。『毛選』では、「『清宮秘史』とは、義和団の愛国運動を誹謗し、帝国主義への投降を鼓吹した反動的な映画でる。劉少奇はこの映画をもちあげて、“愛国主義”の映画だといった」と注記する。『文集』所収文献(第6巻、352-353頁)では『清宮秘史』への注記はない。

毛選第五卷における劉少奇に関わる6件の文献のなかで、『文集』が収録するのが[12、18、39]、未収録が[08、27、28]である(【表3】)。

人物評価にかかわる選集第五卷の資料的考察として第三に掲げるべき事からは、1950年代中国政治において批判された知識人—梁漱溟、胡風と反右派闘争—についてである。

(1)「梁漱溟の反動思想を批判する」(選集35、1953年9月16～18日)は「毛沢東同志が中国人民政府委員会第27回会議の期間に梁漱溟にたいして行った批判の主要部分」であり、(1)「梁漱溟は野心家であり、えせ君子である。彼が政治に無関心であるというのはいふまでもなく、役人になりたくないと言うのもうそである。彼は“郷村建設”とやらをやったが、それは地主の建設であり、郷村の破壊であり、国家の滅亡である。」(2)「梁先生の高次元の綱領にしたがえば、中国は社会主義をきずきあげるどころか、党(共産党とその他の政党)も滅び、国も滅びる。彼の路線はブルジョア路線である」と述べる。この文献は『文稿』『文集』に未収録で、『年譜』に関連する記載がある⁽⁴⁶⁾。ここでは「梁漱溟」に注記し、『梁漱溟問答録』からの引用を提示する。

(2)「“世論の一律”を反駁する」(選集42、1955年5月24日)は、「毛沢東同志が胡風反革命集団を批判するために書いた文章」(表題解説)である。同文は『人民日報』に掲載され、「胡風のいう“世論の一律”とは、反革命分子に反革命的意見の発表を許さないということである。確かにそのとおり、われわれの制度はすべての反革命分子に言論の自由をあたえず、ただ人民内部だけでこの種の自由をあたえる」とする。また、「『胡風反革命集団に関する資料』のはしがきと評語」(43、1955年5月、6月)は、1956年6月に人民出版社が出版した該書のはしがきと評語である。この二つの文献は、いずれも『文稿』『文集』未収録である。『文集』所収の「十大関係について」に、胡風の下記のプロフィールを注記する⁽⁴⁷⁾。

胡風(1902-1985)、湖北蕪春の人、文藝理論家・詩人。中国左翼作家連盟宣伝部長・行政担当書記、中国作家協会理事、中国文聯全国委員会委員などを歴任。1955年、いわゆる「胡風反革命集団」事件で誤って反革命分子とされ、1965年判決。1980年9月、中共中央は法手続きをふまえ、「胡風反革命集団」および胡風本人に対する名誉回復を通知。1981年以降、政協全国委員会常務委員、中国作家協会顧問などに就任。

(3)「力を結集して右派分子の常軌を逸した攻撃に反撃を加えよう」(選集63、1957年6月8日)は、「毛沢東同志が中共中央のために起草した党内指示」である。『文稿』は、「毛

沢東の手稿にもとづく。毛選第五巻に収録された」として収録する⁽⁴⁸⁾。同文献は、①「整風の過程で極少数のブルジョア階級右派分子が機に乗じて「大鳴大放」を叫び新生の社会主義制度に攻撃を加え中共の指導に取って代ろうとしたことに対して、断固反撃することは正しく必要なことであった。しかし反右派闘争はひどく拡大され、結果、一群の知識人・愛国者と党幹部を誤って右派分子と規定し不幸な結果を生んだ」(歴史決議)；②1959～64年、中共中央は段階的に多くの右派分子の帽子を外した；③78年4月、中共中央はすべての右派分子の帽子を外すことを決定、81年末までのこの案件に対する復査・改正を完了した；④本テキストで言及された章乃器・浦熙修・高方は1979・1980年に改正が行われた、と注記する。

V 毛選第五巻の資料的考察（その二、継続革命）

毛選第五巻と歴史決議の相違は、文革評価、換言すればそれを発動する根拠となった「プロレタリア階級独裁のもとでの継続革命」の評価にある。

すなわち、毛選第五巻は、(1)毛主席は、国際共産主義運動の歴史上はじめて、プロレタリア階級独裁の歴史的運命にかかわるこの重要問題に科学的な回答をあたえ、プロレタリア階級独裁のもとでの継続革命という偉大な理論をうち立てた。『毛沢東選集』第5巻のなかでは、主として1956年から1957年にいたる重要著作のなかで、すでにこの理論がうち出されている；(2)毛主席は、プロレタリア階級独裁のもとでの継続革命の理論によって、わが国の社会主義建設をみちびき、1958年には、大いに意気ごみ、つねに高い目標をめざし、多く、はやく、りっぱに、むだなく社会主義を建設するという総路線をさだめた。毛選第五巻の多くの著作には、すでにこの総路線の基本思想が提起されている；(3)プロレタリア文化大革命は、総じていえば、プロレタリア階級および広範な革命の大衆と、劉少奇、林彪および王洪文・張春橋・江青・姚文元らの「四人組」によって代表される党内走資派との闘争にほかならない；(4)20余年にわたる革命的実践、とくにプロレタリア文化大革命を通じて、プロレタリア階級独裁のもとでの継続革命という毛主席の理論は、わが党を武装させ、広範な大衆を武装させた、とする。

これに対して、「歴史決議」は、(1)1966年5月から1976年10月にいたる「文化大革命」によって、党と国家と人民は建国以来最大の挫折と損失をこうむった。この「文化大革命」は毛沢東同志が起こし、指導した。毛沢東同志の起こした「文化大革命」のこれらの左よりの誤った論点は、マルクス・レーニン主義の普遍的原理と中国革命の具体的実践とを結びつける毛沢東思想の軌道から明らかに逸脱したもので、毛沢東思想とは完全区別しな

ればならない；(2) 1976年10月、江青反革命集団を粉砕した勝利は、危機のなかから党を救い、革命を救い、我が国を新しい歴史的発展の時期へと進ませた。こうして「文化大革命」の誤りの是正を求める党内党外の同志たちの声はますます強くなったが、それは大きな障害につきあつた。当時、党中央の主席であつた華国鋒同志が指導思想の面でひきつづき左の誤りを犯したためである。1978年12月に開かれた十一期三中全会は、建国以来のわが党の歴史上、きわめて深い意味をもつ偉大な転換点であつた、と概括する。(既述)

毛選第五巻においてすでに示され、かつ「歴史決議」で「華国鋒同志の左の誤り」と総括されるのは、具体的にどの文献の、どのような叙述を指すのであろうか。

第一に、「中国共産党第八期中央委員会第二回総会会議の演説」(56、1956年11月15日)は、①経済問題、②国際情勢問題、③中ソ関係問題、④大民主・小民主問題からなる。このうち『文集』が収録するのは、④大民主・小民主の問題の最後の一節だけである⁽⁴⁹⁾。毛選第五巻所収の文献には、下記の叙述がある。

- (1) ソ連共産党二十回大会について。わたしは二本の「剣」があるとおもう。一本はレーニンで、一本はスターリンである。いまではスターリンを言う剣をロシア人はなげ捨てた。レーニンという剣も、いまではソ連の一部の指導者によってある程度なげ捨てられてはいないか。わたしの見るところ、かなりなげ捨てられている。
- (2) 民主は方法であり、それがだれにたいしてつかわれ、なにをやるのかを見なければならぬ。われわれは大民主を好む。われわれが好むのは、プロレタリア階級の指導のもとでの大民主である。いま、民主政党、ブルジョア階級は、プロレタリア階級の大民主に反対している。もういちど「五反」ということになると、かれらは賛成しないだろう。かれらは、もし大民主をやれば、民主政党は消滅されてしまい、長期共存することはできなくなる、と大変おそれている。
- (3) ダライたちはインドに巡拝しようとしている。中央は、やはり行かせたほうがよい、と考える。ダライたちは多分帰ってこないだろうし、「共産党は西藏を侵略した」などと毎日われわれをののしり、はては、インドで「西藏独立」を宣言するかもしれない。かれらが打ってくれば、われわれは防ぎ、かれらが攻めてくれば、われわれは守る。いずれにせよ、おのおのが思うようにやればよい。

『文稿』第6冊所収の「中共第八期中央委員会第二回総会の演説」(1956年11月15日)は、講話記録稿ではなく、『人民日報』新聞稿であるが(247頁)、そこから毛選第五巻所収テ

キストにある具体的な論述を読み取ることは困難である⁽⁵⁰⁾。新聞稿の梗概は以下のとおり。

- (1) 毛沢東同志は全会が採用した各方針と措置に完全に同意した。
- (2) 毛沢東同志は、すべての国家の工作スタッフと経済工作スタッフ、とくに各方面の責任者に対して、刻苦素朴な作風を提唱し、大衆と甘苦をともにし、浪費を貪る現象に反対し、さらに整風の方法を採用して、主観主義、セクト主義、官僚主義の傾向と闘うことを呼びかけた。
- (3) 彼は、全党に対して、少数民族問題で断固として大漢族主義に反対し、外国との交際では大国主義に断固反対することを要求した。
- (4) 彼は特に次のように指摘した。マルクス・レーニン主義の密接に人民大衆に依拠するという原則を堅持し、すべての形式での大衆から遊離する作風に反対してはじめて、われわれはソ連ならびに各人民民主国家および全世界の社会主義勢力は、かならず前進にあたっての困難を克服し、さらなる偉大な勝利を獲得することができるであろう。

第二に、「省・市・自治区党委員会書記会議における講話」(57、1957年1月)。毛選第五巻の当該文献は、「一 1月18日の講話」と「二 1月27日の講話」からなる。これに対して『文集』所収のテキストの日付は「1957年1月27日」であり、「毛沢東のこの講話は7点からなる。本書は、第1、2、3、4、6、7点を収録する」とする。ここで『文集』が割愛した「一 1月18日の講話」は、「去年の一年は多事の秋であった。国際的にはフルシチョフ、ゴムルカが風波を起こした一年であり、国内では社会主義的改造が激烈な様相をしめした一年であった。現在もやはり多事の秋で、さまざまな思想がひきつづきあらわれるであろう」とする。また、「二 1月27日の講話」の第5点は「騒ぎを起こす問題」で、「社会主義社会で少数の人が騒ぎを起こすのは、新しい問題であり、大いに研究に値する。……労働者階級に依拠し、貧農・下層中農に依拠し、先進分子に依拠すべきであり、ともかく拠りどころがなければならない。こうしてこそ、ハンガリーのような事件を避けることができるのである」とする。

第三に、「革命の促進派になろう」(67、1957年10月9日)は、「毛沢東同志が中共八期三中全会でおこなった講話」(表題説明)である。講話の主たる論点(①会議の開き方、②整風の方法(大鳴大放・大弁論・大字報)、③農業問題、④二つの方法の活用、⑤「多、快、

好、省」のローガン、⑥過渡期の諸問題)のうち、『文集』は、表題を「農業問題について」と改めて③のみを収録する。さらに『文稿』は「講話記録稿」ではなく、「中共八期三中全会の講話提綱」(ノート)を収録する。毛選第五卷所収の文献には、下記の叙述がある。

- (1) ことしは、大衆が一種の革命形態、大衆闘争の形態を考えだした。大鳴、大放、大弁論、大字報というのがそれである。この形式をしっかりとつかめば、原則的な是非の問題にしる非原則的な是非の問題にしる、また革命の問題にしる建設の問題にしる、みなこの鳴放、弁論の形式で解決でき、しかも比較的是やく解決することができる。
- (2) プロレタリア階級とブルジョア階級との矛盾、社会主義の道と資本主義の道との矛盾、これは疑いもなく、当面のわが国社会の主要な矛盾である。中共八中全会の決議にはこの問題が提起されていなかった。決議には、主要な矛盾は先進的な社会主義制度と立ちおくれた社会的生産力の矛盾であるというくだりがあった。このような提起のしかたは間違っている。
- (3) スターリン問題でわれわれはフルシチョフと矛盾がある。平和移行の問題についても、われわれはフルシチョフらと意見がちがう。このほか、百花斉放・百家争鳴の方針についても、ソ連の同志は理解していない。

第四に、「あくまでも大衆の大多数を信頼しよう」(68、1957年10月13日)は「毛沢東同志が最高国务会議第13回会議でおこなった講話」(表題説明)で、『文稿』『文集』ともに未収録である⁽⁵¹⁾。このテキストには、以下の叙述がある。

- (1) 社会主義革命とは、いったいどのような範囲内の革命なのか、いったいどのような階級のあいだの闘争なのか。それはプロレタリア階級が勤労人民を指導してブルジョア階級とのあいだに進める闘争なのである。……多数の人が社会主義を支持しているという基盤のうえで、いまのこの時期に、大鳴、大放、大弁論、大字報のような形式が現れたことは、たいへん有益なことである。
- (2) ブルジョア知識分子は改造され、小ブルジョア知識分子も改造されなければならない、一步一步改造されて、プロレタリア知識分子になっていくことができるのである。……整風には、放、反、改、学の四つの段階がある。すなわち大鳴大放がその一つ、右派への反撃がその一つ、整頓・改革がその一つ、最後の一つは、い

くらかマルクス・レーニン主義を学び、小型の会議を開いて、微風細雨の方法で批判と自己批判を行うことである。

- (3) 右派は、反共、反人民、反社会主義なのであるから、敵対的勢力である。しかし、われわれは、今かれらを地主、反革命分子と同様には取り扱わない。その基本的標識は、かれらの選挙権をとりあげないということである。個別的には、選挙権を取りあげ労働改造をさせることもありうるが、われわれは、逮捕も選挙権の剥奪もしないという方法によって、かれらに転換の余地をのこし、その分化を有利にみちびくのである。

VI 『毛選』第五卷の資料的考察（その三、農業の協同化） ——

農業の協同化は、毛沢東「農業協同化の問題について」（44、1955年7月31日）を契機として、耕地や役畜の共同所有を基礎とした高級合作社へと事態は短期間に急展開し、1956年末には、ほぼすべての農家が土地の共同所有を基礎とした農業生産協同組合（高級合作社）に組織された。『中国農村の社会主義高潮』（1956年1月、人民出版社）はこうした背景で出版されたが、毛沢東は該書の編集に積極的にかかわり、そのはしがき（47）とともに、収録文に対する評語（48）を執筆した。

毛選第五卷所収の『中国農村における社会主義の高まり』の評語」（48、1955年9月、12月）は43篇の評語を収めるが、冒頭に、以下に示す長文の表題説明を置く。

毛沢東同志は『中国農村における社会主義の高まり』という本を編集したさい、104篇の評語を書いた。ここに収録したのは、そのうちの43篇である。1958年3月、中共中央政治局拡大会議が成都でひらかれたさい、評語の一部がふたたび印刷された。このために、1958年3月19日、毛沢東同志は全文次のような説明を書いた。

「これらの評語は『中国農村における社会主義の高まり』という本におさめたもので、1955年9月と12月に書いた。そのうちの一部はいまだなおその意義を失っていない。だが、そのなかに、1955年は社会主義が資本主義との決戦で基本的な勝利をおさめた年だ、とのべているところがある。こういう言い方は妥当ではない。1955年は、生産関係の所有制の面で基本的な勝利をおさめた年であるが、生産関係のその他の面、および上部構造のいくつか面、すなわち思想戦線の面と政治戦線の面では、まだ基本的な勝利をおさめていないか、あるいはまだ完全な勝利をおさめておらず、なお今後の努力に待たなければならない、というべきである。われわれは、1956年に国際面で

あれほどの大きな風波が立つとは予想もしなかったし、おなじ年に国内面で大衆の積極性をくじく『反暴走』事件がおこるとも予想しなかった。この二つのできごとは、いずれも、右派の狂気じみた攻撃にかなり油をそそぐことになった。ここから得た教訓は、社会主義革命も社会主義建設も順風に帆をあげた状態ですすめられるものではなく、われわれは国際、国内の両面でおこりうる数かずの大きな困難に対処するよういかなければならない、ということである。国際面からいっても、国内面からいっても、全般的な情勢は有利であり、この点は疑いがない。だが、数かずの大きな困難がおこるに違いないから、われわれはそれに対処する用意がなければならない。」

これに対して『文集』所収の「『中国農村における社会主義の高まり』の評語選」では下記の文献説明を掲げるとともに、注釈で毛が評語を付した原文32篇についての文献解説を行っている。

毛沢東は『中国農村の社会主義の高まり』の編集を主宰し、該書176篇のうち104篇に評語を書いた。本書ではそのなかの32篇の評語を収録するが、このうち3篇(26、30、31)は9月に書かれたもので、その他の評語はすべて12月に書かれたか、あるいは9月に起草し12月に改訂・完稿としたものである。毛沢東は大多数の文章の標題に手を入れた。

『毛選』所収の評語43篇、『文集』所収の評語32篇のうち、『毛選』『文集』ともに収録するもの24篇、『毛選』のみに収録するもの19篇、『文集』のみに収録するもの8篇である。下表はこの対照を整理したものである。

『毛選』のみに収録する評語19篇において毛沢東は、(1) 広範な貧農・下層中農による農民協同化の要求は全国で沸々とおこり、それ潮流はすでに抗いがたいものとなっており、これこそが中国農村における社会主義の高まりである [01,02,03,05,08,29]; (2) 同時に、豊かな農民の間ではゆゆしい資本主義的傾向が存在する [06,07,20,22]; (3) 政治工作の基本的任務は、農民大衆にたえず社会主義思想を注ぎこみ、資本主義的傾向を批判することである [09,19]; (4) 農民大衆の創意に由来する立派な計画や大量の増産は、それを速やかにおし広める必要がある [30,31,39]; (5) 条件の整った協同組合は、生産力と生産をいちだんと発展させるため、生産手段の共有を前提とする高級形態を展望すべきである [36,41,42,43]、と主張する。

1958年5月、「社会主義の総路線」が定められ、「多く、速く、よいものを、無駄なく建

表5 『中国農村における社会主義の高まり』の評語

| 毛選第五卷 | 文集 |
|--|--|
| [01] 書記みずから取りくみ、全党で組合づくりにあたらう [x] | [01] 勤儉の精神で組合を経営する [28] |
| [02] 立ちおくれた農村といわれているところでも、すべてが立ちおけているわけではない [x] | [02] かれらは断固として協同化の道を選んだ [17] |
| [03] この郷は二年で協同化した [x] | [03] わずか一か月で全村の協同化を実現した [11] |
| [04] 郷と村の幹部には組合づくりを指導する能力がある [32] | [04] 重大な教訓 [18] |
| [05] 鶏の羽は果たして天まで飛べないか [x] | [05] 歓迎された農業夜間学校 [*] |
| [06] 日和見主義の邪気は消えうせ、社会主義の正気はみなぎる [x] | [06] 一人あたり一畝の灌漑地をつくるべきである [32] |
| [07] 協同化運動のなかで、労働者の家族の積極性はひじょうに高い [x] | [07] 横領・窃盗行為には厳しい闘争を行わねばならない [*] |
| [08] 指導者の意志にそむいて、大衆が自発的につくった協同組合 [x] | [08] 黄安坨農林生産協同組合の長期計画 [*] |
| [09] 鳳岡県崇新郷では、どのように党支部の指導のもとで互助・合作化運動を展開したのか [x] | [09] 協同組合は自分で生産資金問題を解決できる [*] |
| [10] 季節的請負 [30] | [10] 婦人が労働戦線に進出した [23] |
| [11] わずか一か月で全村の協同化を実現した [03] | [11] 新しい状況と新しい問題 [15] |
| [12] 混乱した協同組合が整頓された [31] | [12] 農業生産協同組合、購買販売協同組合、信用協同組合の会計係で会計互助網をつくった経験 [37] |
| [13] 長沙県高山郷武塘農業生産協同組合は、どのようにして中農が優勢を占めている状態から貧農が優勢を占める状態に転化したのか [25] | [13] 三年で67パーセント増産した農業生産協同組合 [40] |
| [14] 福安県で『中農組合』と『貧農組合』がうまれたことの教訓 [20] | [14] 莒南県高家柳溝村青年团支部が労働点数記入学習班をつくった経験 [38] |
| [15] 新しい状況と新しい問題 [11] | [15] 協同化の先導者—陳学孟 [26] |
| [16] 湘潭県清風郷党支部は貧しい組合員の困難解決を助けている [26] | [16] ただ協同化だけ天災に抵抗できる [*] |
| [17] かれらは断固として協同化の道を選んだ [02] | [17] 余った労働力の使いみちがみつかった [35] |
| [18] 重大な教訓 [04] | [18] 婦人を動員して生産に従事させ、労働力不足の困難を解決した [34] |
| [19] 張郭荘協同組合の政治工作 [x] | [19] ここでは大量のブタを飼育している [33] |
| [20] 資本主義的傾向と断固たたかわなければならない [x] | [20] 福安県で『中農組合』と『貧農組合』がうまれたことの教訓 [14] |
| [21] 組合整頓のよい経験 [21] | [21] 組合整頓のよい経験 [21] |
| [22] 反革命分子の破壊活動と断固たたかうべきである [x] | [22] 諸翟郷では兼業で小売をする多くの農民を農業協同組合吸収した [*] |
| [23] 婦人が労働戦線に進出した [10] | [23] 真如区李子園農業協同組合の生産経費を節約した経験 [*] |
| [24] 中山県新平郷第九農業生産協同組合の成年突撃隊 [27] | [24] 一つの郷で協同化の計画をたてる経験 [25] |
| [25] 一つの郷で協同化の計画をたてる経験 [24] | [25] 長沙県高山郷武塘農業生産協同組合は、どのようにして中農が優勢を占めている状態から貧農が優勢を占める状態に転化したのか [13] |
| [26] 協同化の先導者—陳学孟 [15] | [26] 湘潭県清風郷党支部は貧しい組合員の困難解決を助けている [16] |
| [27] 協同組合の政治工作 [29] | [27] 中山県新平郷第九農業生産協同組合の成年突撃隊 [24] |
| [28] 勤儉の精神で組合を経営する [01] | [28] 台山区田美村農業協同組合の農業開墾生産を組織した経験 [*] |
| [29] 紅星集体農場の展望計画 [x] | [29] 協同組合の政治工作 [27] |
| [30] ある協同組合の三か年生産計画 [x] | [30] 季節的請負 [10] |
| [31] 沂濤郷の全面的計画 [x] | [31] 混乱した協同組合が整頓された [12] |
| [32] 一人あたり一畝の灌漑地をつくるべきである [06] | [32] 郷と村の幹部には組合づくりを指導する能力がある [04] |
| [33] ここでは大量のブタを飼育している [19] | |
| [34] 婦人を動員して生産に従事させ、労働力不足の困難を解決した [18] | |
| [35] 余った労働力の使いみちがみつかった [17] | |
| [36] 湘陰県では余った労働力の使いみちの問題を解決した [x] | |
| [37] 農業生産協同組合、購買販売協同組合、信用協同組合の会計係で会計互助網をつくった経験 [12] | |
| [38] 莒南県高家柳溝村青年团支部が労働点数記入学習班をつくった経験 [14] | |
| [39] 勤儉の精神で組合を経営し、山間地区を建設する [x] | |
| [40] 三年で67パーセント増産した農業生産協同組合 [13] | |
| [41] 大型組合の優越性 [x] | |
| [42] 瓊山県第一区の紅旗農業生産協同組合は、事前災害および資本主義思想とたたかうなかで強固になった [x] | |
| [43] 初級形態から高級形態に移行した協同組合 [x] | |

各篇の内容の後に付した括弧 [] は、毛選第五卷所収の標語と文集所収の標語との対応関係を示す。

毛選第五卷所収の標語のあとの [x] は、文集に対応する標語がないことを示す。

文集所収の標語のあとの [*] は、毛選第五卷に対応する標語がないことを示す。

設せよ」のスローガンのもと、農業・工業生産の大幅増をめざす大躍進運動がはじまった。そのねらいは、高度成長を達成してソ連を含む先進国においつくことと、集団化と協同化によって共産主義をなるべく早く実現することであり、農村では協同組合を合併するかたちで人民公社が設立された。上述の毛沢東の主張には「社会主義の総路線」から「プロレタリア階級独裁のもとでの継続革命」に展開する思路を内包しており、ゆえに『文集』所収文献では削除されたと判断される。

1978年12月、安徽省鳳陽県小崗村の農民による包産到戸の誓約が示すように、中共十一期三中全会を契機とする権力中枢の転換は、社会の基層部分での転換が並行して進行していた。中国農村における請負生産はまたたく間に全国に拡大、1980年代なかば、中国社会主義の象徴とされた人民公社は一挙に消滅する。19篇の評語を削除した『文集』が、それに代わって新たに8編の評語を収録した。この新たに収録された評語は、毛沢東時代における中国農業協同化の経験について、農民教育 [05]、組織管理 [07]、業務計画 [08]、農業・農村の自律性 [09]、集団による防災活動 [16]、多角経営と余剰労働力の吸収 [22]、経営管理と労働生産性 [23]、開墾と地域保全 [28] など、農業・農村問題について普遍性をもった有意な論点を提示することによって、毛沢東思想の再定義を企図したものであると解される。

ま と め

【表2】で示したように、毛選第五卷所収70文献のうち該書ではじめて公開されたものが46文献（非公式出版物や語録などのかたちで存在を知られていた16文献をふくむ）、それまでに公刊されていたものが24文献であった。また【表3】で示したように、毛選所収70文献のうち『文集』に収録されたものが46文献、未収録のものが24文献である（一部収録の4文献をふくむ）⁽⁵²⁾。

【表6】（後掲）は、【表2】【表3】に示した毛選第五卷所収の70文献についてその前後の継承関係を整理し直したものである⁽⁵³⁾。結果、以下のように概括することができる。

- (1) 毛選第五卷刊行以前に公刊されていた24文献のうち、『文集』に所収されるのは17文献、未収録が7文献である。
- (2) 毛選第五卷で初めて公開された46文献のうち、『文集』に所収されるのは29文献、未収録が17文献である。
- (3) 『文集』未収録の24文献について、未収録の原因は概ね人物評価・反右派や継続革命などによる。（【表6】の「備考」欄参照）

華国鋒政権 = 毛選第五巻が是とした社会主義建設の総路線ならびにプロレタリア独裁のもとでの継続革命論は、1949年9月の人民共和国成立から53年8月の「過渡期の総路線」を経て推進された社会主義化の帰結としての56年8月開催の中共八全大会路線への批判を前提としていた。これに対して、81年6月の「歴史決議」が行った毛沢東思想の再定義は、文革の理論的根拠となった継続革命論を否定するとともに中共八全大会路線は正しいものであったとした。

本稿のまとめとして、中共八全大会前後の二文献について、毛選第五巻と『文集』での位置づけの違いを示しておく。

一つは「十大関係について」(51、1956年4月25日)。(1)が毛選第五巻の、(2)が『文集』の標題説明である。

(1) これは、毛沢東同志が中共中央政治局拡大会議でおこなった講話である。毛沢東同志はこの講話のなかで、ソ連の経験をいましめとして、我が国の経験を総括し、社会主義革命と社会主義建設における十大関係について論じ、わが国の状況に適合した、多く、はやく、りっぱに、むだなく社会主義を建設するという総路線の基本思想を提起した。

(2) これは、毛沢東が、中共中央政治局拡大会議でおこなった講話である。この会議は1956年4月25日から28日まで北京で開催され、各省・市・自治区の党委書記も参加した。この講話はソ連の経験を戒めとして中国の経験を総括し、すべての積極的要素を動員して社会主義事業のために役立てる基本方針を提出し、中国の状況に適合した社会主義建設の道路に関わる初歩的な探索をおこなった。中央政治局拡大会議は、この講話を討論し、4月28日に毛沢東は討論の状況をふまえた総括講話をおこなった。この総括講話において「芸術問題における百花斉放と学術問題における百家争鳴は、我々の方針となるであろう」と述べた。

毛選第五巻の標題説明が「社会主義建設の総路線」と関連づけて叙述しているのに対して、『文集』は中国的社会主義の道路に対する「初歩的探索」としている。この講話が1956年2月のスターリン批判の衝撃を受けてのものであること、そして百花斉放・百家争鳴が5月からはじまったことを付言しておく。

もう一つは「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」(58、1957年2月27日)。おなじく(1)が毛選第五巻の、(2)が『文集』の標題説明である。

- (1) これは、毛沢東同志が最高國務會議第十一回（拡大）會議でおこなった講話である。その後、毛沢東同志は、当時の記録にもつづいて整理し、いくらかの補足をおこなって、1957年6月19日の『人民日報』に発表した。
- (2) これは毛沢東の最高國務會議での講話である。のちに毛沢東は既存の記録をもとに整理し、さらに若干の重要な補充と改訂をおこない、1957年6月19日に『人民日報』に発表した。この講話は、わが国の生産手段私有制の社会主義改造が基本的に完成したという状況下において、革命期の大規模な暴風雨のような大衆の階級闘争が基本的に終結し、正しく人民内部の矛盾を処理することを我が国の政治生活の主題とすることを明確に提起している点で、重大な理論的・実践的意義を有し、中共八全大会の正しい方針の継続であり発展であった。講話が公开发表される前に、すでに反右派闘争が始まっており、当時の右派分子の共産党と社会主義制度への攻撃という情勢に対する行き過ぎた過大評価によって、講話原稿の整理過程において、階級闘争の激烈さや社会主義と資本主義でどちらが勝つかという問題が挿入され、結果これらとそれまでの講話の精神との論述上のチグハグが生じることになった。

この『文集』の標題説明は、「歴史決議」によって再定義された毛沢東思想において「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」が最も重要な文献の一つであることを述べるとともに、テキストには、反右派闘争のなかで「継続革命」につながるロジックが内包していることに言及している（下線部分）⁽⁵⁴⁾。

表2 毛選第五巻所収文献の公刊・未公刊

| no. | 年月日 | 標題 | 公刊 | 要目 | 備考 |
|-----|---------------|---|----|----|-------------------|
| 01 | 1949/09/21 | 中国人民は立ちあがった | ○ | 1 | 人民日報49/09/22 |
| 02 | 1949/09/30 | 中国人民の大団結万歳 | ○ | | 人民日報49/10/01 |
| 03 | 1949/09/30 | 人民の英雄の名は永遠に不滅である | ○ | | 人民日報49/10/01 |
| 04 | 1949/10/26 | 刻苦奮闘の作風を永遠に保持しよう | ○ | 2 | 人民日報49/10/27 |
| 05 | 1950/03/12 | 富農に対する戦術について意見をもとめる | × | | |
| 06 | 1950/06/06 | 国家の財政・経済状態の基本的好転のためにたたかおう | ○ | 5 | 人民日報50/06/13 |
| 07 | 1950/06/06 | 四方に出撃してはならない | × | | |
| 08 | 1950/06/23 | 徹底した革命派になろう | ○ | 6 | 人民日報50/06/24 |
| 09 | 1950/09/25 | 諸君は全民族の模範である | ○ | | 人民日報50/09/26 |
| 10 | 1950/10/08 | 中国人民志願軍への命令 | × | 8 | |
| 11 | 1951/01/19 | 中国人民志願軍は朝鮮の山一水一草一木を愛護しなければならない | ▲ | | 人民日報語録70/10/25 |
| 12 | 1951/02/18 | 中国共産党中央政治局拡大会議の決議の要点 | × | 9 | |
| 13 | 1951/05/01 | 反革命鎮圧にあたっては党の大衆路線を実施すべきである | ▲ | 10 | 万歳丁 |
| 14 | 1950/12～51/09 | 反革命鎮圧にあたっては着実に、的確に、容赦なくたたかすべきである | ▲ | | 万歳丙、万歳丁 |
| 15 | 1951/05/20 | 映画『武訓伝』についての討論を重視すべきである | ○ | 11 | 人民日報51/05/26、万歳甲 |
| 16 | 1951/10/23 | 三大運動の偉大な勝利 | ○ | 12 | 人民日報51/10/24 |
| 17 | 1951/11～52/03 | 「三反」「五反」の闘争について | ▲ | 13 | 万歳丁 |
| 18 | 1951/12/15 | 重大な事業として農業の互助・協同化にとりくもう | × | | |
| 19 | 1952/01/01 | 年頭のことは | ○ | | 人民日報52/01/03 |
| 20 | 1952/04/06 | 西藏の工作方針についての中国共産党中央の指示 | × | | |
| 21 | 1952/06/06 | 労働者階級とブルジョア階級との矛盾は国内における主要な矛盾である | × | | |
| 22 | 1952/08/04 | 団結し、敵と味方をはっきり区別しよう | × | | |
| 23 | 1952/10/24 | 中国人民志願軍の大勝利を祝う | × | | |
| 24 | 1953/01/05 | 官僚主義、命令主義、法規・規律違反に反対しよう | × | 14 | |
| 25 | 1953/03/16 | 大漢民族主義を批判する | × | | |
| 26 | 1953/03/19 | 「五多」問題を解決しよう | × | | |
| 27 | 1953/05/19 | 劉少奇、楊尚昆が規律にそむき、独断で党中央の名義を用い文書を出したことに対する批判 | × | | |
| 28 | 1953/06/15 | 総路線から離れた右よりの観点を批判する | ▲ | 16 | 人民日報語録67/11/23 |
| 29 | 1953/06/30 | 青年団の活動では青年の特徴を配慮すべきである | ▲ | 17 | 万歳甲 |
| 30 | 1953/07/09 | 国家資本主義について | × | | |
| 31 | 1953/08/01 | 過渡期における党の総路線 | ▲ | | 社会主義教育課程的閱讀文件匯編57 |
| 32 | 1953/08/12 | 党内のブルジョア思想に反対する | × | | |
| 33 | 1953/09/07 | 資本主義工商業の改造でかならず経なければならない道 | × | 20 | |
| 34 | 1953/09/12 | 抗美援朝の偉大な勝利と今後の任務 | × | 18 | |
| 35 | 1953/09/16～18 | 梁漱溟の反動思想を批判する | × | 19 | |
| 36 | 1953/10、11 | 農業の互助・協同化についての二回の談話 | × | 21 | |
| 37 | 1954/06/14 | 中華人民共和國憲法草案について | × | 22 | |

表2 (続き)

| no. | 年月日 | 標題 | 公刊 | 要目 | 備考 |
|-----|------------|------------------------------|----|----|-------------------------------|
| 38 | 1954/09/15 | 偉大な社会主義国を建設するために奮闘しよう | ○ | 23 | 人民日報54/09/16、万歳甲、万歳戊 |
| 39 | 1954/10/16 | 紅樓夢研究の問題についての書簡 | ○ | 24 | 人民日報67/05/26 |
| 40 | 1955/01/28 | 原子爆弾は中国人民をおどしつけることはできない | × | 25 | |
| 41 | 1955/03/01 | 中国共産党全国代表者会議での演説 | ▲ | 26 | 万歳甲 |
| 42 | 1955/05/24 | 「世論の一律」を反駁する | ○ | 27 | 人民日報55/05/24、万歳甲、万歳戊、紅旗68-02 |
| 43 | 1955/05、06 | 『胡風反革命集団に関する資料』のはしがきと評語 | ○ | 28 | 人民出版社55/06 |
| 44 | 1955/07/31 | 農業協同化の問題について | ○ | 29 | 人民日報55710717、選読甲、選読乙 |
| 45 | 1955/09/07 | 農業協同化は党员、团员と貧農・下層中農に依拠すべきである | × | | |
| 46 | 1955/10/11 | 農業協同化についての弁論と当面の階級闘争 | ▲ | 30 | 万歳丙、万歳丁 |
| 47 | 1955/09、12 | 『中国農村における社会主義の高まり』のはしがき | ○ | | 人民出版社55/12 |
| 48 | 1955/09、12 | 『中国農村における社会主義の高まり』の評語 | ○ | | 人民出版社55/12 (選読甲2、選読乙5) |
| 49 | 1955/12/21 | 農業十七か条たいする意見をもとめる | × | | |
| 50 | 1956/03/05 | 手工業の社会主義的改造をはやめよう | × | | |
| 51 | 1956/04/25 | 十大関係について | ○ | | 万歳乙、万歳丁、万歳戊、人民日報76-12-26 |
| 52 | 1956/07/14 | アメリカ帝国主義はハリコの虎である | × | | |
| 53 | 1956/08/30 | 党の団結をつよめ、党の伝統を受け継ごう | × | | |
| 54 | 1956/09/25 | わが党のいくつかの歴史的経験 | × | | |
| 55 | 1956/11/12 | 孫中山先生を記念する | ○ | | 人民日報56/11/12、万歳丁、万歳甲、万歳戊 |
| 56 | 1956/11/15 | 中国共産党第八期中央委員会第二回総会の演説 | ▲ | | 人民日報語録70/04/22 |
| 57 | 1957/01/01 | 省・市・自治区党委員会書記会議における講話 | ▲ | | 万歳丁 |
| 58 | 1957/02/27 | 人民内部の矛盾を正しく処理する問題について | ○ | ◎ | 人民日報57/06/19、選読甲 |
| 59 | 1957/03/12 | 中国共産党全国宣伝工作会議における講話 | ○ | ◎ | 選読甲 |
| 60 | 1957/03/01 | 刻苦奮闘を堅持し、緊密に大衆と結びつこう | × | | |
| 61 | 1957/05/15 | 事態は変化しつつある | ▲ | | 万歳甲語録、万歳戊語録、人民日報語録68-09-01 |
| 62 | 1957/05/25 | 中国共産党は全中国人民の指導的中核である | ○ | | 人民日報57-05-26、光明日報57-05-26、万歳甲 |
| 63 | 1957/06/08 | 力を結集して右派分子の気違いじみた攻撃に反撃をくわえよう | × | | |
| 64 | 1957/07/01 | 文匯報のブルジョア的方向は批判すべきである | ○ | | 人民日報57/07/01、万歳戊 |
| 65 | 1957/07/09 | ブルジョア右派の攻撃を撃退しよう | ▲ | | 万歳丁 |
| 66 | 1957/07/01 | 一九五七年の夏季の情勢 | ▲ | | 万歳甲摘録、万歳戊摘録、人民日報摘録68/10/16 |
| 67 | 1957/10/09 | 革命の促進派になろう | × | | |
| 68 | 1957/10/13 | あくまでも大衆の大多数を信頼しよう | ▲ | | 万歳丁 |
| 69 | 1957/11/18 | 党内団結の弁証法的方法 | ▲ | | 万歳丁、万歳戊 |
| 70 | 1957/11/18 | すべての反動派はハリコの虎である | □ | | 人民日報58/10/31 |

表3 毛選第五巻所収文献と『文稿』『文集』の関係

| no. | 年月日 | 毛選第五巻 | | 文稿 | 文集 | |
|-----|---------------|---|----------|---|----|---------------------|
| | | 標題 | 説明 | 冊頁 | 対照 | 来源 |
| 01 | 1949/09/21 | 中国人民は立ちあがった | 開会のことば | ①4-8 | ○ | 人民日報 |
| 02 | 1949/09/30 | 中国人民の大団結万歳 | 起草(宣言) | ①10-12 | ○ | 人民日報 |
| 03 | 1949/09/30 | 人民の英雄の名は永遠に不滅である | 起草(碑文) | ①13 | ○ | 人民日報 |
| 04 | 1949/10/26 | 刻苦奮闘の作風を永遠に保持しよう | なし | ①96 | ○ | 人民日報 |
| 05 | 1950/03/12 | 富農に対する戦術について意見をもとめる | 通達 | ①272-274 | ○ | 手稿 |
| 06 | 1950/06/06 | 国家の財政・経済状態の基本的好転のためにたたかおう | 書面報告 | ①390-396 | ○ | 人民日報 |
| 07 | 1950/06/06 | 四方に出撃してはならない | 講話(部分) | ①397-400 | ○ | 毛沢東著作選読 |
| 08 | 1950/06/23 | 徹底した革命派になろう | 閉会のことば | ①414-418 | × | |
| 09 | 1950/09/25 | 諸君は全民族の模範である | あいさつ | ①532-533 | ○ | 人民日報 |
| 10 | 1950/10/08 | 中国人民志願軍への命令 | 命令(部分) | ①543-544 | ○+ | 原件 |
| 11 | 1951/01/19 | 中国人民志願軍は朝鮮の山一水一草一木を愛護しなければならない | 指示 | ②43-44 | ○+ | 手稿 |
| 12 | 1951/02/18 | 中国共産党中央政治局拡大会議の決議の要点 | 起草(党内通達) | ②126-130 | ○ | 原件 |
| 13 | 1951/05/01 | 反革命鎮圧にあたっては党の大衆路線を実施すべきである | 指示 | | ○+ | 原件 |
| 14 | 1950/12~51/09 | 反革命鎮圧にあたっては着実に、的確に、容赦なくたたかすべきである | 指示(部分) | ①729、 ②36-37、201、 280-282、 358-359 | × | |
| 15 | 1951/05/20 | 映画『武訓伝』についての討論を重視すべきである | 社説(部分) | ②316-318 | ○ | 手稿 |
| 16 | 1951/10/23 | 三大運動の偉大な勝利 | 閉会のことば | ②481-486 | × | |
| 17 | 1951/11~52/03 | 「三反」「五反」の闘争について | 指示(部分) | ②524-525、 ②524-525、 ②548-549、 ③97-98、 ③308-312、 ③353-355 | ○+ | 手稿 |
| 18 | 1951/12/15 | 重大な事業として農業の互助・協同化にとりくもう | 起草(党内通達) | ②578-579 | ○+ | 手稿 |
| 19 | 1952/01/01 | 年頭のことば | | ③1-2 | ○ | 人民日報 |
| 20 | 1952/04/06 | 西藏の工作方針についての中国共産党中央の指示 | 起草(党内指示) | ③384-387 | ○ | 手稿 |
| 21 | 1952/06/06 | 労働者階級とブルジョア階級との矛盾は国内における主要な矛盾である | 意見 | ③458 | ○ | |
| 22 | 1952/08/04 | 団結し、敵と味方をはっきり区別しよう | 講話(要点) | | × | |
| 23 | 1952/10/24 | 中国人民志願軍の大勝利を祝う | 起草(指示) | ③596-597 | ○ | 手稿 |
| 24 | 1953/01/05 | 官僚主義、命令主義、法規・規律違反に反対しよう | 起草(党内指示) | ④8-11 | ○+ | 手稿 |
| 25 | 1953/03/16 | 大漢民族主義を批判する | 起草(党内指示) | ④127-133 | ○ | 手稿 |
| 26 | 1953/03/19 | 「五多」問題を解決しよう | 起草(党内指示) | ④135-139 | ○+ | 手稿 |
| 27 | 1953/05/19 | 劉少奇、楊尚昆が規律にそむき、独断で党中央の名義を用い文書を出したことに対する批判 | 書面批判 | ④229-231 | × | |
| 28 | 1953/06/15 | 総路線から離れた右よりの観点を批判する | 講話(部分) | | × | |
| 29 | 1953/06/30 | 青年団の活動では青年の特徴を配慮すべきである | 談話 | ④258-263 | ○ | 毛沢東著作選読 |
| 30 | 1953/07/09 | 国家資本主義について | 意見 | ④271 | ○ | 手稿 |
| 31 | 1953/08/01 | 過渡期における党の総路線 | 重要指示 | ④301-302 | ○+ | 社会主義教育課程的 閲読文件匯編 |
| 32 | 1953/08/12 | 党内のブルジョア思想に反対する | 演説 | | × | |
| 33 | 1953/09/07 | 資本主義工商業の改造でかならず経なければならぬ道 | 談話(要点) | ④324-327 | ○+ | 手稿 |
| 34 | 1953/09/12 | 抗美援朝の偉大な勝利と今後の任務 | 演説 | ④330 | × | |

表3 (続き)

| no. | 年月日 | 毛選第五巻 | | 文稿 | 文集 | |
|-----|-------------------|----------------------------------|-----------|-------------------|----|----------------|
| | | 標題 | 説明 | 冊頁 | 対照 | 来源 |
| 35 | 1953/09/16 ～18 | 梁漱溟の反動思想を批判する | 批判 (要点) | | × | |
| 36 | 1953/10、 11 | 農業の互助・協同化についての二回の 談話 | 談話 | ④356-360 | ○ | 談話記録稿 |
| 37 | 1954/06/14 | 中華人民共和国憲法草案について | 演説 | ④500-508 | ○ | 毛沢東著作選読 |
| 38 | 1954/09/15 | 偉大な社会主義国を建設するために奮 闘しよう | 閉会のことば | ④553-555 | ○ | 人民日報 |
| 39 | 1954/10/16 | 紅樓夢研究の問題についての書簡 | 書簡 | ④574-576 | ○ | 手稿 |
| 40 | 1955/01/28 | 原子爆弾は中国人民をおどしつけるこ とはできない | 談話 (要点) | | × | |
| 41 | 1955/03/01 | 中国共産党全国代表者会議での演説 | | ⑤59-64、 ⑤71-76 | ○ | |
| 42 | 1955/05/24 | 「世論の一律」を反駁する | 批判文 | | × | |
| 43 | 1955/05、 06 | 『胡風反革命集団に関する資料』のは しがきと評語 | | | × | |
| 44 | 1955/07/31 | 農業協同化の問題について | 報告 | ⑤234-263 | ○ | 人民日報 |
| 45 | 1955/09/07 | 農業協同化は党员、団員と貧農・下層 中農に依拠すべきである | 党内指示 | | ○ | 手稿 |
| 46 | 1955/10/11 | 農業協同化についての弁論と当面の階 級闘争 | 結論 | | × | |
| 47 | 1955/09、 12 | 『中国農村における社会主義の高まり』 のはしがき | | ⑤484-487 | × | |
| 48 | 1955/09、 12 | 『中国農村における社会主義の高まり』 の評語 | 評語 (部分) | ⑤488-575 | ▲+ | 中国農村的社会主義高潮 |
| 49 | 1955/12/21 | 農業十七か条たいする意見をもとめる | 起草 (通達) | ⑤478-481 | ○ | 手稿 |
| 50 | 1956/03/05 | 手工業の社会主義的改造をはやめよう | 指示 (部分) | | ○ | 談話記録稿 |
| 51 | 1956/04/25 | 十大関係について | 講話 | ⑥82-109 | ○ | 人民日報 |
| 52 | 1956/07/14 | アメリカ帝国主義はハリコの虎である | 談話 (部分) | | ○ | 談話記録稿 |
| 53 | 1956/08/30 | 党の団結をつよめ、党の伝統を受け継 ごう | 演説 | | ○ | 講話記録稿 |
| 54 | 1956/09/25 | わが党のいくつかの歴史的経験 | 談話 (部分) | | ○ | 談話記録稿 |
| 55 | 1956/11/12 | 孫中山先生を記念する | 記念文 | ⑥241-242 | ○ | 人民日報 |
| 56 | 1956/11/15 | 中国共産党第八期中央委員会第二回総 会の演説 | | ⑥247 | ▲ | 講話記録稿 |
| 57 | 1957/01/01 | 省・市・自治区党委員会書記会議にお ける講話 | | | ▲ | 講話記録稿 |
| 58 | 1957/02/27 | 人民内部の矛盾を正しく処理する問題 について | 講話 | ⑥316-360 | ○ | 人民日報 |
| 59 | 1957/03/12 | 中国共産党全国宣伝工作会議における 講話 | | ⑥378-395 | ○ | 毛沢東著作選読甲 |
| 60 | 1957/03/01 | 刻苦奮闘を堅持し、緊密に大衆と結び つこう | 講話 (部分) | ⑥399-402 | ○ | 講話記録稿 |
| 61 | 1957/05/15 | 事態は変化しつつある | 党内文書 | ⑥469-476 | × | |
| 62 | 1957/05/25 | 中国共産党は全中国人民の指導の中核 である | 談話 | ⑥488 | ○ | 人民日報 |
| 63 | 1957/06/08 | 力を結集して右派分子の気違いじみた 攻撃に反撃をくわえよう | 起草 (党内指示) | ⑥496-498 | × | |
| 64 | 1957/07/01 | 文匯報のブルジョアの方向は批判すべ きである | 社説 | ⑥529-534 | × | |
| 65 | 1957/07/09 | ブルジョア右派の攻撃を撃退しよう | 講話 | | × | |
| 66 | 1957/07/01 | 一九五七年の夏季の情勢 | 党内文書 | ⑥543-553 | × | |
| 67 | 1957/10/09 | 革命の促進派になろう | 講話 | ⑥592-598 | ▲ | 講話記録稿 |
| 68 | 1957/10/13 | あくまでも大衆の大多数を信頼しよう | 講話 | | × | |
| 69 | 1957/11/18 | 党内団結の弁証法的方法 | 発言 (抜粋) | ⑥625-647 | ○ | 中共八大二次会議 文件 |
| 70 | 1957/11/18 | すべての反動派はハリコの虎である | 発言 (抜粋) | ⑥625-647 | ○ | 中共八大二次会議 文件 |

表6 毛選第五巻所収文献の継承関係

| no. | 年月日 | 標題 | 公刊 | 毛選 | 文集 | 備考 |
|-----|---------------|---|----|----|----|------------|
| 01 | 1949/09/21 | 中国人民は立ちあがった | ○ | ○ | ○ | |
| 02 | 1949/09/30 | 中国人民の大団結万歳 | ○ | ○ | ○ | |
| 03 | 1949/09/30 | 人民の英雄の名は永遠に不滅である | ○ | ○ | ○ | |
| 04 | 1949/10/26 | 刻苦奮闘の作風を永遠に保持しよう | ○ | ○ | ○ | |
| 05 | 1950/03/12 | 富農に対する戦術について意見をもとめる | × | ○ | ○ | |
| 06 | 1950/06/06 | 国家の財政・経済状態の基本的好転のためにたたかおう | ○ | ○ | ○ | |
| 07 | 1950/06/06 | 四方に出撃してはならない | × | ○ | ○ | |
| 08 | 1950/06/23 | 徹底した革命派になろう | ○ | ○ | × | 毛選：「劉少奇」削除 |
| 09 | 1950/09/25 | 諸君は全民族の模範である | ○ | ○ | ○ | |
| 10 | 1950/10/08 | 中国人民志願軍への命令 | × | ○ | ○ | |
| 11 | 1951/01/19 | 中国人民志願軍は朝鮮の一山一水一草一木を愛護しなければならない | × | ○ | ○ | |
| 12 | 1951/02/18 | 中国共産党中央政治局拡大会議の決議の要点 | × | ○ | ○ | |
| 13 | 1951/05/01 | 反革命鎮圧にあたっては党の大衆路線を実施すべきである | × | ○ | ○ | |
| 14 | 1950/12～51/09 | 反革命鎮圧にあたっては着実に、的確に、容赦なくたたかすべきである | × | ○ | × | 反革命鎮圧 |
| 15 | 1951/05/20 | 映画『武訓伝』についての討論を重視すべきである | ○ | ○ | ○ | |
| 16 | 1951/10/23 | 三大運動の偉大な勝利 | ○ | ○ | × | |
| 17 | 1951/11～52/03 | 「三反」「五反」の闘争について | × | ○ | ○ | |
| 18 | 1951/12/15 | 重大な事業として農業の互助・協同化にとりくもう | × | ○ | ○ | |
| 19 | 1952/01/01 | 年頭のことば | ○ | ○ | ○ | |
| 20 | 1952/04/06 | 西藏の工作方針についての中国共産党中央の指示 | × | ○ | ○ | |
| 21 | 1952/06/06 | 労働者階級とブルジョア階級との矛盾は国内における主要な矛盾である | × | ○ | ○ | |
| 22 | 1952/08/04 | 団結し、敵と味方をはっきり区別しよう | × | ○ | × | |
| 23 | 1952/10/24 | 中国人民志願軍の大勝利を祝う | × | ○ | ○ | |
| 24 | 1953/01/05 | 官僚主義、命令主義、法規・規律違反に反対しよう | × | ○ | ○ | |
| 25 | 1953/03/16 | 大漢民族主義を批判する | × | ○ | ○ | |
| 26 | 1953/03/19 | 「五多」問題を解決しよう | × | ○ | ○ | |
| 27 | 1953/05/19 | 劉少奇、楊尚昆が規律にそむき、独断で党中央の名義を用い文書を出したことに対する批判 | × | ○ | × | 劉少奇・楊尚昆批判 |
| 28 | 1953/06/15 | 総路線から離れた右よりの観点を批判する | × | ○ | × | 劉少奇批判 |
| 29 | 1953/06/30 | 青年団の活動では青年の特徴を配慮すべきである | × | ○ | ○ | |
| 30 | 1953/07/09 | 国家資本主義について | × | ○ | ○ | |
| 31 | 1953/08/01 | 過渡期における党の総路線 | × | ○ | ○ | |
| 32 | 1953/08/12 | 党内のブルジョア思想に反対する | × | ○ | × | 薄一波批判 |
| 33 | 1953/09/07 | 資本主義工商業の改造でかならず経なければならない道 | × | ○ | ○ | |
| 34 | 1953/09/12 | 抗米援朝の偉大な勝利と今後の任務 | × | ○ | × | |
| 35 | 1953/09/16～18 | 梁漱溟の反動思想を批判する | × | ○ | × | 梁漱溟批判 |
| 36 | 1953/10、11 | 農業の互助・協同化についての二回の談話 | × | ○ | ○ | |

表6 (続き)

| no. | 年月日 | 標題 | 公刊 | 毛選 | 文集 | 備考 |
|-----|------------|------------------------------|----|----|----|--------------|
| 37 | 1954/06/14 | 中華人民共和国憲法草案について | × | ○ | ○ | |
| 38 | 1954/09/15 | 偉大な社会主義国を建設するために奮闘しよう | ○ | ○ | ○ | |
| 39 | 1954/10/16 | 紅樓夢研究の問題についての書簡 | ○ | ○ | ○ | |
| 40 | 1955/01/28 | 原子爆弾は中国人民をおどしつけることはできない | × | ○ | × | |
| 41 | 1955/03/01 | 中国共産党全国代表者会議での演説 | × | ○ | ○ | |
| 42 | 1955/05/24 | 「世論の一律」を反駁する | ○ | ○ | × | 胡風批判 |
| 43 | 1955/05、06 | 『胡風反革命集団に関する資料』のはしがきと評語 | ○ | ○ | × | 胡風批判 |
| 44 | 1955/07/31 | 農業協同化の問題について | ○ | ○ | ○ | 鄧子恢批判 (名誉回復) |
| 45 | 1955/09/07 | 農業協同化は党員、団員と貧農・下層中農に依拠すべきである | × | ○ | ○ | |
| 46 | 1955/10/11 | 農業協同化についての弁論と当面の階級闘争 | × | ○ | × | 鄧子恢批判 |
| 47 | 1955/09、12 | 『中国農村における社会主義の高まり』のはしがき | ○ | ○ | × | |
| 48 | 1955/09、12 | 『中国農村における社会主義の高まり』の評語 | ○ | ○ | × | 継続革命 |
| 49 | 1955/12/21 | 農業十七か条たいする意見をもとめる | × | ○ | ○ | |
| 50 | 1956/03/05 | 手工業の社会主義的改造をはやめよう | × | ○ | ○ | |
| 51 | 1956/04/25 | 十大関係について | ○ | ○ | ○ | |
| 52 | 1956/07/14 | アメリカ帝国主義はハリコの虎である | × | ○ | ○ | |
| 53 | 1956/08/30 | 党の団結をつよめ、党の伝統を受け継ごう | × | ○ | ○ | |
| 54 | 1956/09/25 | わが党のいくつかの歴史的経験 | × | ○ | ○ | |
| 55 | 1956/11/12 | 孫中山先生を記念する | ○ | ○ | ○ | |
| 56 | 1956/11/15 | 中国共産党第八期中央委員会第二回総会の演説 | × | ○ | × | 継続革命 |
| 57 | 1957/01/01 | 省・市・自治区党委員会書記会議における講話 | × | ○ | × | 継続革命 |
| 58 | 1957/02/27 | 人民内部の矛盾を正しく処理する問題について | ○ | ○ | ○ | |
| 59 | 1957/03/12 | 中国共産党全国宣伝工作会議における講話 | ○ | ○ | ○ | |
| 60 | 1957/03/01 | 刻苦奮闘を堅持し、緊密に大衆と結びつこう | × | ○ | ○ | |
| 61 | 1957/05/15 | 事態は変化しつつある | × | ○ | × | 反右派 |
| 62 | 1957/05/25 | 中国共産党は全中国人民の指導的中核である | ○ | ○ | ○ | |
| 63 | 1957/06/08 | 力を結集して右派分子の気違いじみた攻撃に反撃をくわえよう | × | ○ | × | 反右派 |
| 64 | 1957/07/01 | 文匯報のブルジョア的方向は批判すべきである | ○ | ○ | × | 反右派 |
| 65 | 1957/07/09 | ブルジョア右派の攻撃を撃退しよう | × | ○ | × | 反右派 |
| 66 | 1957/07/01 | 一九五七年の夏季の情勢 | × | ○ | × | 反右派、継続革命 |
| 67 | 1957/10/09 | 革命の促進派になろう | × | ○ | × | 継続革命 |
| 68 | 1957/10/13 | あくまでも大衆の大多数を信頼しよう | × | ○ | × | 継続革命、反右派 |
| 69 | 1957/11/18 | 党内団結の弁証法的方法 | × | ○ | ○ | |
| 70 | 1957/11/18 | すべての反動派はハリコの虎である | ○ | ○ | ○ | |

註

- (1) 毛里和子『現代中国政治』名古屋大学出版会1993年；加藤弘之・久保亨『進化する中国の資本主義』岩波書店2009年；三宅康之「党・政・軍三位一体の“統治構造”」、浅野亮・川井悟編著『概説近現代中国政治史』ミネルヴァ書房2012年。
- (2) 高原平生・前田宏子『開発主義の時代へ：1972-2014』岩波新書2014年。
- (3) 習近平「在慶祝改革開放40周年大会上的講話」（2018年12月18日）、胡錦濤「胡錦濤在紀念改革開放30周年大会講話」（2008年12月18日）。
- (4) 孫揚「団結・憲法・四つの近代化：1975年の歴史的意味」、中村元哉編『憲政から見た現代中国』東京大学出版会2018年、170頁。
- (5) 浅野亮「中華人民共和国建国から改革開放まで：1945-81年」、浅野亮・川井悟編著『概説近現代中国政治史』125～127頁。
- (6) 今堀誠二『毛沢東研究序説』（勁草書房、1966年）は、毛選は社会主義建設段階の彼の見解を示すものであり、新民主主義段階の彼の見解を知るためには改訂前のテキストに戻る必要があると述べていた。竹内実監修『毛沢東集』10巻（北望社、1970～72年）は、毛選と従前のテキストと対照しその異同を逐次明示する。
- (7) 劉金田・呉曉梅『《毛沢東選集》出版的前前後後』、中共党史出版社、1993年、140頁。
- (8) 華国鋒「把無産階級專政下の繼續革命進行到底：學習《毛沢東選集》第五卷」。
- (9) 「關於建国以来党的若干歷史問題的決議」。文中の数字は文献に付された項目番号である。
- (10) 劉金田ほか『《毛沢東選集》出版的前前後後』、141頁。
- (11) 龔育之「序《毛沢東著作版本編年紀事》」蔣建農・辺彦軍・劉敏・張素華『毛沢東著作版本編年紀事』（上）、湖南人民出版社、2003年、10頁。
- (12) 中共中央文献研究室編『毛沢東年譜（1949-1976）』6巻、中央文献出版社、2013年。
- (13) 龔育之「序《毛沢東著作版本編年紀事》」13頁。
- (14) 「標題」の日本語訳は、『毛沢東選集』第五巻（外文出版社1977年）によった。
- (15) 『毛沢東思想万歳』など文革期・紅衛兵による非公認刊行物について、中国では、毛沢東著作集の一つの版本として認定していない。劉金田ほか『《毛沢東選集》出版的前前後後』が毛選第五巻ではじめて公開刊行された文件数を46篇とするのは、本表の「×」30篇と「▲」16篇を加えた数である。
- (16) 未見。中村公省「解題」（京都大学人文科学研究所『毛沢東書作年表』下巻・語彙索引篇、1980年）による（17-20頁）。「毛沢東選集第5巻要目」は、(1) 1949年9月21日～1957年11月17日の毛沢東の主要な論著を編集して毛選第五巻としその見本本が出された、(2) 1949年9月21日から1951年12月14日までの文献は31篇である（リストを掲げる）、(3) 1951年12月14日から1957年11月17日までの論著には、1957年2月27日「人民内部の矛盾を正しく処理することについての講話」、3月12日「中国共産党全国宣伝工作会議での講話」が含まれる、とする。
- (17) 中村公省「解題」23頁。
- (18) 龔育之「序《毛沢東著作版本編年紀事》」、6頁。
- (19) 龔育之「序《毛沢東著作版本編年紀事》」4-5頁。
- (20) 劉金田ほか『《毛沢東選集》出版的前前後後』、137-138頁。
- (21) 「表1」「要目」欄で欠けている文献は、下記のとおりである。3「在中央人民政府委員会

- 第4次会議上の講話」(1949年12月2日)；4「在莫斯科の臨別演説」(1950年2月17日)；7「制止美帝國主義對亞州的侵略」(1950年6月28日)；15「在中国人民政治協商會議第1屆全國委員會第4次會議上的講話」(1953年2月7日)；31「資本主義工商業改造和農業生產問題」(1955年12月14日)。(中村公省「解題」、18-19頁)。
- (22)《胡喬木伝》編写組編『鄧小平の二十四次談話』人民出版社、2004年、20-21頁。龔育之によると、(1)「三人小組」の康生は病状が深刻で名前だけであった；(3)李鑫・胡繩・吳冷西・熊復を責任者とし、中央党校からやってきた数人が参加する「材料組」が実際の編集工作にあたった、とする(龔育之「序《毛沢東著作版本編年紀事》」6頁)。
- (23)《胡喬木伝》編写組編『鄧小平の二十四次談話』25、36、41、48、61、63、91頁。「音楽工作者への談話」(1956年8月24日)は、毛選第五卷に収録されていない。中共中央文献研究室編『鄧小平年譜：1975-1997』中央文献出版社、2004年、66、73、78-79、85、91、94-95、109-110頁も参照。
- (24)《胡喬木伝》編写組編『鄧小平の二十四次談話』108-109頁。
- (25) 龔育之「序《毛沢東著作版本編年紀事》」8-9頁。
- (26) 龔育之「序《毛沢東著作版本編年紀事》」7頁。
- (27)《胡喬木伝》編写組編『鄧小平の二十四次談話』31-32頁。『鄧小平年譜』68-69頁。
- (28)「論全党全國各項工作的總綱」(1975年10月7日)、「關於加快工業發展的若干問題」(1975年9月2日)、「科学院工作匯報提綱」(1975年9月26日)。
- (29)《胡喬木伝》編写組編『鄧小平の二十四次談話』80、105頁。『鄧小平年譜』128頁。
- (30)『建国以來毛沢東文稿』第6冊、中央文献出版社、1992年、475-476頁。
- (31)『建国以來毛沢東文稿』第6冊、553頁。
- (32)「中国共産党第十一屆中央委員會第三次全体會議公報」(1978年12月22日)。
- (33) 龔育之「序《毛沢東著作版本編年紀事》」9-10頁。
- (34)『文稿』の「出版説明」は、「この文献集は、一部の文稿が一定の機密性を有しているため、区師クラスの機関と指導幹部、社会科学硏究と教学に従事する高級専門人員に限定して発行する。適切に保管し、公言・複製してはならない。公開に發表された文稿をのぞいて、中共中央文献硏究室の同意なく引用してはならない」とする。
- (35) 華国鋒「把無産階級專政下的繼續革命進行到底：學習《毛沢東選集》第五卷」。
- (36) 朱佳木「十一屆三中全會及其主要文件形成的若干情况：我所知道的十一屆三中全會」(下)『党的文献』1999年第1期。
- (37) 蓋軍「十一屆三中全會的歷史背景和意義」『理論學刊』1998年第6期。
- (38) エズラ・F・ヴォーゲル『現代中国の父・鄧小平』日本經濟新聞出版社、2013年、524-527、528、539頁。
- (39) 盛平「胡耀邦促成劉少奇冤案平反」『国家人文歷史』2015年第8期、86-89頁。
- (40) マックファーカー(麥克法夸爾)「毛沢東の繼承問題と毛主義の終結」『劍橋中華人民共和國史：1966-1982』(麥克法夸爾・費正清主編、上海人民出版社1992年)446-447頁。
- (41) マックファーカー「毛沢東の繼承問題と毛主義の終結」448-449頁。
- (42) 唐亮「現代中国における政治権力闘争の進め方とその方法」『現代中国硏究』第3号、1998年、42-43頁。
- (43)『文集』第6卷、442頁。
- (44)『年譜』第2卷、450頁。

- (45) 『文集』第6巻、214-215頁。
- (46) 『年譜』第2巻、166-168頁。
- (47) 『文集』第7巻、46-47頁。「論十大関係」の注13。
- (48) 『文稿』第6巻、496-498頁。
- (49) 『文集』所収文献の表題は「刻苦奮闘は我々の政治的真面目である」、表題説明は「これは毛沢東が中共八期二中全会で行った講話の一部である」である。梗概は「わたしは、平和な時期には、軍隊の幹部と軍隊以外の幹部とのあいだの給料の差を一步一步縮小していくことに賛成である。ただし、完全な平等主義をやるのではない。」
- (50) 『年譜』第3巻、32-35頁、『中国共産党重要会議紀事・増訂本』（姜華宣ほか主編、中央文献出版社2006）206-263頁に、この毛沢東演説からの抜粋がある。
- (51) 『年譜』第3巻226-228頁に関連記事がある。
- (52) 【表1】では一部収録の4文献を『文集』への収録文献にカウントし、未収録を20文献としていた。
- (53) 【表2】で「▲」とした項目を【表6】では「×」とした。『毛沢東思想万歳』など文革派資料集は正規の刊行物とはみなされていないこと、「語録」などでの言及は文献そのものの刊行とはみなすことはできないからである。また【表3】で「▲」とした項目を【表6】では「×」とした。この4文献がいずれも毛選所収文献の主要部分を継承していないと判断したからである。さらに【表3】「文集」欄の「+」は『文集』所収文献における付加を示すものであるため【表6】では削除した。
- (54) 『文稿』所収テキストの標題説明では、5月上旬から6月中旬までの毛沢東自身による改訂・補充と党内指導者に対する意見聴取の慷慨を記している（第6冊、358-360頁）。